全日本男子、初のアジア選手権へ

日本協会は2月19日の月例常務理事会（東京）で、技術部から提出された第1回アジア・ハンドボール選手権（3月26日〜4月6日クウェート）に出場する全日本代表（男子）のコーチングスタッフと選手14名（GK3、FP11）を承認した。

同選手権は、昨年1月発足したAHF（アジアハンドボール連盟）の主催によるアジアで初めての選手権で、最低6ケ国の参加が見込まれ国際ハンドボール界、アジアスポーツ界などから大きな注目を集めている。

日本協会は、当初、この大会が来年2月の第9回世界選手権Aグループ（デンマーク）につながらぬことからナショナルチームの派遣について必しも積極的ではなかったが、「宿願であったアジアでの初のチャンピオンシップ」「アジア各国の友好と親善」「日本のレベルに対する関心の高さ」などから、1月の月例常務理事会で、最終的にナショナルチームを送りこむことに決めたものである。

アジア選手権日本代表

	氏名	年令・所属	身長	出場数
▽団　長	（未発表）			
▽監　監	竹野　奉昭	（40才　日本協会技術委員）		
▽コーチ	東　　嘉伸	（40才　日本協会技術委員）		
▽GK	○本田　　洋	（30才・大阪イーグルス）	179cm	㊶
	○柴田　正章	（23・本田技研鈴鹿）	185	⑭
	斉藤将一郎	（23・秋田教員）	187	⑨
▽FP	○藤中　憲二	（29・大同特殊鋼）	178	㊻
	○中井　武三	（28・大同特殊鋼）	180	㊿
	○松原　光三	（27・大同特殊鋼）	180	⑮
	○花輪　　博	（26・大同特殊鋼）	177	㉚
	柳川　　実	（23　大同特殊鋼）	175	⑪
	中本　満明	（22・大同特殊鋼）	183	初
	斎藤　幸司	（23・大崎電気）	176	初
	大熊　昌巳	（23　大崎電気）	178	初
	○佐藤　要二	（27・本田技研鈴鹿）	180	㉝
	○佐々木健一	（27・三景）	171	⑱
	○蒲生　晴明	（22　中大）	192	㉜

・○印はモントリオールオリンピック代表
・○内数字は公式国際試合出場数

オリンピック代表9人含む

選手は、昭和51年度ナショナル（本誌148号参照・19名）から12名が選考されたほか、無活動ながら9名を残しているヤング全日本の大熊昌巳（大崎電気）と、竹野監督の懇望によって中本満明（大同特殊鋼）が加えられた。中本は初の全日本入り。木野、穂積、津川ら湧永薬品（広島）勢が単独ヨーロッパ遠征（本誌13頁参照）のため参加できず、オリンピック選手・菊池（稲球会）も未調整で欠けるが、藤中、中井、松原、花輪（大同特殊鋼）、佐藤、柴田（本田技研鈴鹿）、本田（大阪イーグルス）、佐々木（三景）ら9人のモントリオール代表が含まれ、ベストオーダーと云える。

中大の蒲生は4月から大同特殊鋼入りが内定している。

「モスクワ」へのスタートに

コーチングスタッフは竹野―東のオリンピック・ペアがそのままで、竹野監督は「初大会だけに友好、親善が強く打ち出されようが日本は過去の国除実績からも優勝しなければならない。

今秋の世界選手権予選、さらに世界選手権―モスクワオリンピックへの出発点としても貴重な大会になろう」と云っている。

なお、竹野構想の一つに、長身GK・斎藤（秋田教員）の強肩を買ってFPへコンバートするものがあるが、同選手のナショナル参加がGKとしての実績のため、見送られる公算が強い。

代表チームは2月24日から3月1日まで名古屋、3月16日から23日まで東京で強化合宿、23日午後5時羽田を出発する予定。

団長については、全国代議員会で会長（代行）、理事長一任となっているが、派遣の場合は3月20日の新・全国理事会で発表される。

安藤、岡前両審判員も

AHFは、このほど日本協会に第1回アジア選手権のため、2名の国際審判員を送るよう要望。日本協会は安藤純光（法大出、日本協会審判部長）、岡前義春（日体大出）の両氏派遣を決めた。

日本人審判員が、外国における公式国際大会でレフェリングするのは、昨年2月のモントリオールオリンピックアジア第1次予選（台北）の安藤・佐野和夫ペアについで二度目である。

世界選手権予選兼ねず

第1回アジア選手権は、世界選手権（Aグループ）が来年2月にせまっていることから、そのアジア予選を兼ねるのではないかという推測がいぜん消えていないが、渡辺和美IHFアジア担当理事（日本）は、強くそれを否定している。

これは、アジア選手権がIHF未加盟国を含めた大会であることと、AHF（アジアハンドボール連盟）が、AGF（アジア競技連盟）加盟国に限られていることなどが理由である。

世界選手権のアジア予選は今秋開かれるというが、具体的な発表は一つもされていない。

「ハンドボール」52年4月号（第151号）目次

【表紙写真】世界学生選手権出場の全日本学生健闘
中沢重夫（団長）氏提供

日本リーグ勢の「国体辞退」見送り

田村会長、任期満了で勇退

全国代議員会

新代議員による定期全国代議員会は2月20日午前10時から東京渋谷の岸記念体育会館に21名が出席（定数52名、有効委任状16通＝成立）して開かれた。

冒頭、田村正衛会長から「新しい時代、新しい日本協会を建設するため、任期満了を機に9年にわたる会長のポストを辞したい」とする挨拶が行われた。

すでに、昨年11月14日の臨時代議員会において、辞意が明きらかにされていたこともあり、43年以来4期半にわたっての労をねぎらう大きな拍手のもとに激動のなかで健斗された第5代会長を送った。

このあと、山田代議員（全日本教職員連）が全会を代表して謝辞を述べ、引きつづき、田村氏を顧問に推たいする動議を行い、満場一致で承認した。

林副会長が「会長代行」

後任会長については、具体的な候補者があげられなかったため、1時間近い論議となり、この問題を検討する小委員会を即時開催するとして小憩、別室で5名の委員により協議されたが、田村会長の規約上の任期満了（52年3月31日）まで、林達夫副会長を会長代行とすることでまとまり、会議の承認を受けた。

したがって、後任は4月1日まで残る1ケ月余の間に、林会長代行と現執行部によって、人選などが行われることになったが、問題が煮つまらない場合は、林会長代行と新副会長（後掲）、新理事長（3月20日に選出）、それに代議員会代表として山田計、岡村昭二（東京）の両氏を加えた「会長問題特別委員会」を設けて、早急に〝解決〟を企ることとした。

なお、52、53年度日本協会会長推せん理事（14名以内）の人選は林会長代行に一任することが承認された。（＝別掲）

保坂氏ら3副会長留任

副会長については、監事の選出とともに、この場で5人の代議員と荒川清美理事長によって小委員会が編成され、別室での協議から林達夫会長代行を含む現任の保坂周助（神奈川協会々長）、徳永睦繁（全国高体連部長、日本リーグ運営委員長）の3氏の留任を決め、監事については入江暢一（現日本協会理事）、吉田正次郎（元日本協会理事）両氏を新任することとした。

この人事について特に異議はなく承認されたが、監事の入江氏は関東ブロックから引きつづき、次期も理事として推せんされており林会長代行が近く話合う予定。

西敏郎氏の逝去にともない副会長の〝補充〟が行われるのではないか、とみられたが見送られた。

顧問、参与各氏は留任。

また、日本体協代議員、日本オリンピック委員会（JOC）委員には、引きつづき荒川清美氏（現理事長）を派遣することとなった。

協会加盟金は三本建て

例年、定期会議で長時間論議となる財政問題は、すでに昨秋の会議で一切が承認（＝本誌148号参照）されているため、今回は、執行部の用意した「登録チーム数20以下の協会加盟金を今年度に限り半額の二万五千円とする」という提案の審議のみが行われた。

これは、1月の月例常務理事会で申し合わされていたものだが、各代議員は拒否反応。結局、却下され、52年度加盟金は

・Aランク（100チーム以上）10万円
・Bランク（99チーム以下）5万円
・加盟団体　5万円

という前回決議の三本建てのままとなった。

ただし、登録チームの少ない県に対しては、日本協会が積極的に普及活動や援助事業を行うことが要望され、荒川理事長もこれを約した。

このほか、51年度会計は、まずまずの見通しと報告され、「組織協力金」は、まだ30～40％の未納県を残すが、時間がかかっても〝完納〟へ持ちこむことが確認された。

強い、地方での〝国体評価〟

この日の会議で、最大の議論を呼んだのは、日本リーグ勢の国体出場問題。

トップチームの〝国体辞退〟は長年の論議であり、日本リーグ発足で、いっそう強くなった。

常務理事会も再三の協議で、ようやく「辞退」の方向へまとめあげ代議員会へ初めてその旨の提案を持ちこんだのだが、執行部の予想に反し、強い反撥をうけた。

これは、現在、地方におけるスポーツの〝評価〟が、自治体からの補助を受けて出る国体の成績によってかなり左右されるためで、日本リーグや、それに匹敵するチームをもつ地方は、その活躍がそのままハンドボールの位置の高さにつながっているからだ。

社会人――いわゆるクラブチームがトップに立つ企業チームが居ては育たないという、執行部案支持の意見もあったが、「全日本で優勝するよりも国体優勝のほうが地方では高い評価をうける」「仮に辞退となれば、日本リーグを脱退し、国体出場を目指すだろう」といった激しい発言もあって普及第一論は、しだいにしめり勝ち。

1時間を越す大論戦の末、当分の間、日本リーグ勢の国体出場辞退問題を見送るということに落ち着いた。

これにより1、2月の月例常務理事会で申し合わされた〈辞退案〉は却下されたことになり、数年間にわたる論争の結末としては、いささか後味の悪さを残した。

◇代議員会出席者　斎藤（青森）、桑名（栃木）、岡村（東京）、高橋（群馬）、砂長（茨城）、金子（埼玉）、庭山（新潟）、柳沢（長野）、志田（福井）、中根（三重）、岡田（岐阜）、岩本（京都）、尾本（滋賀）、前田（大阪）、松原（鳥取）、甲斐（佐賀）、堀の内（宮崎）、島田（熊本）、仲田（沖縄）、小袋（全国高体連）、山田（全日本教職員連）

また、沖縄協会から強い要望のあった同県の国体ストレート出場枠設置については、県予選―九州予選―本大会にかかる経費が、地域的な特殊性から莫大なものになるという事情への理解もあって、とりあえず、昭和53年度（長野国体）の成年女子以外の3部門のうち1部門の1を沖縄県へ廻すことが確定した。

今のところ成年男子が有力だが前回の会議までは、この1は北信越ブロックに配分される予定であったため北信越協会へ了解を求める。

これがまとまれば、53年度、沖縄県は成年男女の2種別に予選なしで代表チームを送れるわけだ。54年度以降、どの種別にこの特典を与えるかは、今後協議する。

来年2月に40周年行事

行事面では第1回アジア選手権への参加を承認、今秋のソ連招待（男女ともモントリオール・オリンピック優勝）が、明るい見通しと云われながらいぜん空白のままとなっており、実現へ努力が望まれたほか、来年2月の「日本協会40周年記念行事」のため、特別事業委員会を発足させ、企画にあたることとなった。

「日本ハンドボール史」の編さんについても、早急に具体化させる。

12月の第29回全日本総合選手権8月の全国中学生大会などは、51年度どおりの実施となり、2年目を迎える日本リーグは前、後期制を採ることが確認され「運営委員会規程」の一部改正を承認。

懸案のクラブ大会は、登録問題とのからみや、クラブの性格づけがいぜん不鮮明なため52年度内の実施は難しいとの報告があり、なお1年間研究をつづけ、53年度に発足をとりあえずの目標とすることになった。

〝強化対策〟は新執行部待ち

注目の頂点強化対策については日本体協の新路線などもあり、日本協会としての新しい方向が示されるかにみられたが、昨秋の会議同よう、特に発言はなく、一切を3月20日発足の新執行部にゆだねた感じ。

わずかに、日本体協強化予算とのからみで、日本協会52年度予算の一部組みなおし提案が議決され

新理事ほぼ出揃う

20日に理事会

日本協会は、今春、役員改選期にあたり、各ブロック、各加盟団体に新理事の推せんを求めていたが、2月19日の〆切りまでに全日本学連（2名）を除く17氏が決まった。

注目の会長推せん理事の人選は別掲のとおり田村会長の辞任で、林会長代行の手によって行われた

新理事会は「強化対策委(仮称)」の復活によって、機構の一部手なおしが予想され、昨秋の構想では、これまでの部組織を委員会組織に改めて、全理事を各セクションにつかせる、としている。

なお、新理事(任期2年)による初会議は3月20日午前10時から東京・岸記念体育会館で開かれ、理事長、常務理事を選出、専門委員長、日本リーグ派遣委員の決定などを行う予定。

昭和52，53年度 日本協会理事

北海道	石切山稔治
東北	森　恭一
北信越	柳沢　民弥
関東	入江　暢一
東海	伊藤　和夫
近畿	幸田　末之
中国	柳井　文治
九州	藤田　八郎
四国	越智　武
実連	山田　稔
教職員連	横地　宇吉
	高橋　健夫
高体連	遠藤　健次
	嶋田新太郎
自衛隊連	清水　正
	富永　劭
	古庄　昌雄

会長推せん理事14名（以内）は，3月8日林達夫会長代行によって12名がリストアップされ，各氏に交渉中。

現時点で欠員の2名（以内）について，林会長代行は，新理事長決定後4月中旬までに補充する意向。

名会長・田村正衛氏を送る

昭和43年2月から今春3月まで、田村正衛氏(71才)が会長の座にあった9年間(4期半)は、日本ハンドボール界の激動期とも云える時代である。

オリンピックへの定着によって、事業化が一気に巨大化、国際化し、それまでの日本協会事業とは比べものにならぬほどの大きなスケールとなった。

田村氏は、その一つ一つを実に地道にこなしていった。

全国会議はもちろん、毎月の常務理事会にも、四日市市からほとんど欠席することなく出かけられ、理事たちの論議へ熱心に加った。

同志社大学水泳部創始者の一人、三重県体育協会会長として12年間のキャリアが、アマチュア・スポーツに対する確固たる信念を築きあげ、ともすれば、オリンピック、オリンピックで浮かれる執行部の言動に、的確な方向を示されたものだ。

荒川清美理事長も、いわゆる辣腕(らつわん)型ではなく、堅実派であったから、うってつけのコンビになった。

しかし、決断の速さも相当なもので、有名無実の評議員会を捨て、代議員会制に切り替えたこと(50年1月)や、イスラエル女子との密室試合決行(50年2月)など大問題にも拘らず動議即決裁と云った感じだった。

一昨年春あたりから、将来の発展のために企業チームの手を全面的に借りる必要がある、という発言をしばしばされるようになった。

自身がオーナーであった田村紡女子チームは当然のこと他の企業チームが、社業の時間をさいて練習や試合をすることに顔を曇らせていた氏を知る者にとっては、180度の転換と云えたが、これは「オリンピックや世界選手権へ参加することに意義、の時代は去った」という氏一流の洞察に発するものだった。

できればモントリオール・オリンピックを前に、その体制の第一歩を踏み出したい、と一部の人に辞意をもらしたが慰留され、今期をつとめあげられた。

日本協会、日本ハンドボール界の前途は洋々としている。

しかし、それは、このいちばん難しい時期を無難に乗り切らせた田村氏の手腕で土台造りが成されたからだ。

史上屈指の名会長・田村正衛氏の多幸と健康をお祈りしたい。

ただけに終った。
すでに新年度から「選手強化対策委(仮称)」の復活が決まっており、頂点強化対策系の人事は、日本体協の認める月額10万円の有給コーチ(=総務担当コーチ1名)の人選を含めて、新執行部がどのような構想を打ち出すか、スポットライトは、新執行部の動きに当てられることとなった。

青森国体要領

訂正してください

日本協会は、別掲のとおり2月20日の全国代議員会で、日本リーグ勢の国体辞退の決定を見送ったため、未確定要素を含めて配布した「第32回(青森)国体実施要項」のうち次の事項を訂正すると発表各都道府県協会関係者の注意をうながしている。
◇第32回国体ハンドボール競技実施要項「6、参加資格」のうち(4)成年男子を除くすべての種別のチーム構成は単一または2チーム以上の混成にしてもよい、のうち「成年男子を除く」を削除。
(5)本年度日本リーグに出場するチームに所属登録された者は参加できない、を全文削除。

高校は継続、学生隔年に

日韓交流決まる

今年度の日韓交流について実連、学連、高体連は韓国側と折しょうをつづけていたが、このほど次のようにまとまった。学連は毎年開催から隔年に変わる。
高校(男女)は両国体協事業としては昨年度で打ち切られたが、〝単独交流〟としての継続が決まり、今夏は日本の代表チームが訪韓する。
なお、すでに社会人女子は全日本実業団選抜の遠征が確定、団長に近藤金博氏(全日本実連、東京重機監督)、監督に白神邦雄氏(ブラザー工業監督)が発表されている。選手は4月上旬決まる。
また、学生も団長に藤松博氏(全日本学連会長代行・東海)、総務役員に市川孝夫氏(全日本学連理事・九州)、監督に藤原侑氏(全日本学連理事・関東)、男子コーチに大西武三氏(筑波大監督)、女子コーチに樫塚正一氏(武庫川女大監督)、マネジャーに松下信宏君(中大)、渡辺富士子さん(日本女体大)が決まっている。

○…52年度日韓交流…○

▽第6回日韓女子社会人交流 4月28日~5月5日(韓国各地)
▽第7回日韓男子社会人交流 5月14日~23日(神戸、東京などで5試合)
▽第11回(女子第6回)学生交流 6月16~25日(韓国各地)
▽第11回(女子第4回)高校交流 8月中旬(韓国各地)

学生界の日程決まる

全日本学連は2月12日東京で開いた全国役員会で、今年度の行事日程を次のように決め、発表した日韓交流は別掲。
▽第27回(女子第9回)全日本学生選抜東西対抗(9月15日・京都)
▽第20回(女子第13回)全日本学生選手権(11月7~11日・大阪)

実業団選手権は名古屋で

新たにオールスター戦

全日本実連は、これまで各地転戦(サーキット)で日程を消化していた全日本実業団選手権(日本実業団リーグ)を、今年度の第18回大会から一ケ所開催に戻すことを決め、明春53年3月20日から4日間名古屋市で開く。出場チームや競技法式は未定。
なお、2部ともいうべき男子の第9回全国実業団トーナメントは53年2月9日から12日まで水戸市、女子の第5回実連会長杯大会は6月10日から12日まで岐阜市でそれぞれ行う。
また、今年度から男女のオールスター東西対抗(仮称)を行うことになり、第1回を53年1月7、8日に予定している。

〝独立〟への色強める

運営委規程を改正

日本リーグでは、第1回リーグを終った時点で、「運営委員会規程」を全面的に再検討、20ケ所をこす修正を決め、全国代議員会の承認をうけた。
これまで日本協会が運営面でかなりの〝権限〟をもっていたが、それを運営委員会に置きかえたのが特色である。
同委の自信もさることながら、発足以前に、いちぢ日本協会内で話し合われた「日本リーグは、一つの加盟団体とすることが望ましい」とする考えに近づきつつあるとも云え、今後の成り行きが注目される。なお、52年度から運営委員は各チーム1名(現行2名)に変わる。このほかに日本協会からの派遣委員5名が加わる。

昭和52・53年度代議員名簿

所属	氏名	役職
北海道	岡田 豊大	(常任理事)
青森	斎藤 浩	(理事長)
岩手	箱崎 敬吉	(副会長)
宮城	山路 康男	(常務理事)
秋田	豊島 慶男	(常務理事)
山形	会田 恒雄	(理事長)
福島	遠藤 道雄	(理事長)
茨城	高島 耕義	(理事長)
栃木	桑名 照雄	(事務局長)
群馬	高橋 潔	(理事長)
埼玉	金子 永治	(総務委員長)
千葉	浮谷 貞雄	(副会長)
東京	岡村 昭二	(理事)
神奈川	若崎 重富	(理事長)
山梨	古屋 正	(副会長)
新潟	庭山 政幸	(理事長)
長野	柳沢 民弥	(理事長)
富山	角 勉	(理事長)
石川	若山 博	(理事長)
福井	志田 省吾	(理事長)
静岡	久保田竜治	(常務理事)
愛知	栗脇 巌	(副会長)
三重	中根 武彦	(理事長)
岐阜	岡田 重博	(理事長)
滋賀	尾本 和男	(副会長)
京都	岩本 定男	(理事)
大阪	前田 吉弘	(副理事長)
兵庫	常松 喬	(会長)
奈良	堀内 俊大	(会長)
和歌山	中井 康彦	(理事長)
鳥取	松原 紀機	(副理事長)
島根	高尾 茂	(理事長)
岡山	永井恒三郎	(会長)
広島	丸口 哲美	(理事長)
山口	青木 操	(副理事長)
香川	辻 要	(理事長)
徳島	前田誠之助	(理事長)
愛媛	高橋 満年	(副会長)
高知	川崎 秀雄	(理事長)
福岡	岡井抽已義	(理事長)
佐賀	甲斐 忠義	(理事長)
長崎	田中丸善一郎	(会長)
熊本	島田 秀四	(副理事長)
大分	福田 稔	(理事長)
宮崎	堀の内真澄	(理事長)
鹿児島	堀之口貞男	(理事長)
沖縄	仲田 豊順	(会長)
高体連	小袋 是郎	(副部長)
学連	藤松 博	(会長代行)
実連	岡部 正文	(副理事長)
教職員連	山田 計	(会長)
自衛隊連	早坂 勢三	(副理事長)

・( )内の役職は51年12月30日現在

世界へはばたけ日本のハンドボール

（協賛者御芳名・順不同）

アジア選手権

日程など未発表

大会開幕まで2週間となった3月10日現在、第1回アジア選手権について、大会事務局を兼ねるクウェート協会から、日本協会に対して日程はもとより、競技法式、会場、使用球、レフェリーなどいっさい連絡がなく、最終合宿（3月16～23日）を前にしたナショナルチームは落ちつかぬ表情である。

日本協会でも3月26日から4月6日まで12日間という大会期間の〝長さ〟に疑問を抱き、当初予定された国々がエントリーしなかった（あるいは取り消した）のではないかというみかたもしている。

日本協会からの再三の問い合せには「間もなく大会要領を送る」という返事ばかり。

荒川理事長は『まさか延期や中止ということにはならないだろうが、初歩段階の連絡が充分でないようでは、大会運営が思いやられる。

ＡＨＦ（アジアハンドボール連盟）発足時に、いちばん心配されたのもこの点である』といっている。

大会展望

第1回アジア選手権はアジアのみならず国際ハンドボール界からも注目と期待を集めている。

参加国は、昨年発足したＡＨＦ（アジアハンドボール連盟）加盟国に限られているが、別掲のように参加国など、まだいっさい発表されていない。

しかも、初の大会とあって、優勝争いを占うには、あまりにも資料不足だが、日本の戦力を中心にこれまでの実績から展望してみた

（編集委員会）

実績ある日本、多彩な布陣

優勝を狙えるのは、やはりキャリアのある日本、中国、韓国にしぼられるのではないか。

特に日本は、現代一流の攻防技術を体得しており竹野・全日本監督も「優勝したいのではなく、優勝しなければならない」と、全アジアにおける日本の立ち場を認識している。

発表された布陣（本誌1頁参照）は、モントリオール・オリンピック代表から3人（木野、穂積、菊池）を欠くとはいえ、組織プレー個人技とも脂（あぶら）の乗り切った選手を揃えている。本場・ヨーロッパでも高い評価をうけている藤中（大同特殊鋼）、佐藤（本田技研鈴鹿）の攻撃力はますます鋭さを加えており、花輪（大同特殊鋼）、佐々木（三景）の多彩なテクニックも、各国選手の目を見はらせるだろう。

松原－柳川の大同コンビによる速攻は、いわゆる〝日本戦法〟の輔を成すものであり、アジア勢が今後ヨーロッパに対抗するための戦術として注目されるものと思う

木野の跡つとめる中井

ディフェンス面はＧＫ陣が、昨春のオリンピック予選と同じベテラン本田（大阪イーグルス）、柴田（本田技研鈴鹿）、斎藤（秋田教員）のトリオ。本田の老巧さと、若い二人の迫力あるキーピングでまず完ぺきと云える。

コーチングスタッフは斎藤の体軀（187cm、85Ｋ）と強肩を見込んでＦＰ転向を考え、斎藤自身も昨夏の全日本教職員選手権でテスト済みだが、今回は結局、ＧＫで登録されよう。

新鮮な構想ではあるが、こうしたことは慎重に進めたほうがいい

ＦＰ守備網の要は中井（大同特殊鋼）。昨秋痛めた右手掌も治り切った。

木野が脱けているだけに、ゲームメーカーとしての重責もあり、彼の動きは一つの焦点である。

蒲生、エースへのスタートに

久々に新鋭が並んだ。オリンピック出場で、また一回りプレーが大きくなった蒲生（中大－大同特殊鋼）は、卒業試験などで、コンディションが悪いと云われていたが、さすがに若い。2月の強化合宿で完全に遅れを取り戻した。

日本協会では、この大会を一九八〇年のモスクワオリンピックに向けるスタートとみており、蒲生がエースとしての道を、本格的に歩み出すことを期待している。

大熊、斎藤（ともに大崎電気）中本（大同特殊鋼）は揃って全日本としては海外初遠征。

大熊のスピードと突進力は、穂積、菊池を欠くだけに貴重だろう

海外初遠征の3選手

★斉藤幸司（ＦＰ左腕）、秋田大曲高－日体大－大崎電気、28年11月生れ、１ｍ76、48年全日本（Ｂ）入り。既婚。

★大熊昌巳（ＦＰ）、中大付高－中大－大崎電気、28年4月生れ、1ｍ78、47年ヤング全日本、48年全日本（Ｂ）入り、（49年～51年ヤング全日本に戻る）。50年第6回世界学生代表に選ばれながら遠征直前負傷で欠場。

★中本満明（ＦＰ）、山口安下庄高－大同特殊鋼、29年4月生れ、1ｍ83、全日本実連ジュニアから今回いきなり全日本入りのラッキーボーイ。高校時代はバスケットボール選手。

斎藤(左腕)は、秀れたジャンプ力を活かし、空間からのアンダー・ハンドシュートという特技をもつ。
この大会で自信をつければ、このさき日本にとって武器となる。
中本は地道な努力が実った。地味な選手の全日本入りは嬉しい。ポストプレーの巧さ、中井と並ぶ守りの固さは定評がある。

充実した内容で優勝を

こうみてくると日本の攻守はかなり多彩だ。
日本の動向は、すべての面で参加各国の注目の的となろうし、日本のレベルが、一つの目標線になることは間違いない。
また、日本体協競技力向上委員会は新しく、オリンピックにつながる強化事業推進の参考資料として、球技ではアジア地域における成績に一つのピントをあてている。
内外の視線の厳しさを日本チームは感じとって、充実した内容の戦いが望まれる。

意気あがる韓国

日本の独走阻止に秘かな自信をいだいているのが韓国だ。
韓国は、かねてから「世界よりアジア」という主張をもっており、アジア選手権の発足を、どこよりも喜び、意義づけている。
当初、3～4月に行われる第1回世界ジュニアにエントリー、初めてヨーロッパへ代表チームを送りこむ準備を進めていたが、アジア選手権が開かれると聞いてあっさり世界ジュニアへの申しこみを取り消し、全力をこの大会に注ぎこんでいる。
すでに代表チームは、1月から数回の強化合宿を行ったとの情報もあり、侮れない。
2月来日した朴応喆・韓国協会理事に聞くと『主力は昨年3月、台湾でのモントリオール・オリンピックアジア第1次予選の時とあまり変わっていない』そうで、車聖福―金成憲の成均館大OBコンビを要に、李鍾七、鄭亨均、高正圭、尹鍾沢らが健在とみられる。
新進では、昨年6月の日韓学生交流で目立った金光洙、崔容煥、張星淳あたり。
もう一つ、韓国に有利な条件として、クウェートでの会場が屋外(アウトドアコート)になる可能性が強いことだ。(注・渡辺和美IHFアジア担当理事は「クウェートには、昨年5月現在、40m×20mの国際コート規格をもつ体育館がない」と云っている)
韓国の主要大会はいぜん屋外であり、室内中心のプレーを組み立てている日本に比べ〝慣れ〟の点で差が生じる、とも云えなくはない。
日本―韓国は6年前、ミュンヘンオリンピック予選以来昨春までに4回対戦しているが、20―9、21―7、25―15、20―15と僅かながら差を詰められてきた。
今回は、意気ごみでは日本より韓国が上という人もおり、過去の記録に頼ってはならないだろう。

中国、日本戦に自信か

ベールをぬぐ中国。日本とは実に10年5カ月ぶりの顔合せ。
いわゆる文革後、中国はヨーロッパからユーゴ、フランス両ナショナルとテイミソアラ工業学院(ルーマニア)、フランス軍隊選抜の4チームを招いている。
このうち、ユーゴナショナル(50年3月)とは各地選抜が12―35、16―39、13―44、15―32。
フランスナショナル(51年11月)とは中国ナショナルが19―24、19―28のスコアを残した。
ユーゴはご承知のとおり、ミュンヘンオリンピックの勝者で、48年9月来日し、世界最高の攻守をみせつけているが、復活間もない中国も一蹴された感じだ。
フランスは国際的には「Bの下」といわれその成績は、日本協会関係者に注目されていた。
それが前掲のような結果で、まだまだ、中断前の実力を取り戻していない、とする声が高くなった。
ともかく、中断前―40、41年と2度にわたる交流で、日本は17試合してわずかに2勝(日本30―20安徽選抜・40年、芝浦工大23―21中国・41年)しただけ、ナショナル同士では14―26、14―26、16―22(以上遠征)、17―18(駒沢)と日本の4連敗に終っている。
しかし、中国がAHF結成の音頭をとり、今回の選手権発足にも大いに力を貸したのは自信あってのことどみられ、フランス戦だけから、日本優位と判断するのは早計であろう。選手はかなり長身揃いということだ。

欧州流のシリア、クウェート

このほかの各国については、日本協会は、IHF(国際ハンドボール連盟)広報に載る国際試合記録を拾う程度でとても戦力分析などはできないのだが、それらを総合してみるとシリア、クウェートのが、一応の実力を備えているようだ。
両国ともIHF加盟は古く、国内リーグも活発、外国(東欧諸国)からコーチを招くなどして、むしろ戦術的には日本、韓国などよりヨーロッパ的なのではなかろうか。
シリアは51年10月のパン・アラブ競技大会で優勝(本誌9頁参照)
クウェートは50年11月カイロでのパン・アラブハンドボールトーナメント、アラブ競技大会の両大会とも2位になっている。
クウェートは地元でもあり、上位進出をぜひとも果たしたいところだ。
大会の成否もクウェートの〝実力〟にかかっているが、アジアで初の大がかりな大会、大会要領がいまだに送られてこないのでも判るとおり、レフェリー、コートの設営、練習場など世界選手権と同じ運営を想定して臨むと混乱する面もあろう。
だが、10年前、いや5年前でもアジアでこれだけの国が集ってハンドボールの大会を開くことは考えられなかった。
日本選手は、同じ地域、身近な国々と交流できるようになったことをまず、喜ぶべきである。
そして、持てる力を存分に発揮して優勝することが、これからのアジア・ハンドボール界の前進につながる。
日本と互角の国が輩出すれば、やがてオリンピックや世界選手権へ、アジア地域から2ケ国以上が出場できるようになる。
もちろん、〈日本優位〉とは云うものの、その裏付けはなく、思わぬ国のレベルが高いことは充分考えられる。ホッケーやバスケットボールで示すセンスからすればインドなど、その最たるもの。日本が〝ハンドボール先進国〟にふさわしいマナーと友好、親善の姿勢を示すことも、大会成功の一つに数えられるだろう。

アジア球界の現状

クウェートでのアジア選手権が近づいた。活気づくアジアハンドボール界だが、4大陸でいちばん遅れて立ちあがったせいか、各国の実態はほとんどつかめていない。
手持ちのデーターをとにかくまとめてみた。

〈杉山　茂〉

正直のところアジアハンドボール界が、こうも急速に発展するとは思わなかった。
本山のヨーロッパ諸国が、あまり〝未開発地域〟への普及に積極的でなかったし、アジアでの先進国・日本も、自国内の拡充に追われてアジア全体に手をさしのべるだけの余裕がなかった。
アジアにおけるハンドボールの不毛は、IHF（国際ハンドボール連盟）と日本に苦い思い出を刻みつけている。
一九六四（昭39）年の東京オリンピックで、一時はハンドボールの採用がかなり有望とされながら最後に来て見送られた理由の一つとして「アジアにおける未普及」があげられたことである。
IHFの「ハンドボールをヨーロッパのスポーツから世界のスポーツへ発展させよう」という姿勢は、この一事が一つのきっかけになっている。

不明確だった西アジア諸国

一九七二（昭47）年のミュンヘンオリンピック採用で、ハンドボールは国際スポーツ界にとび出し、それと前後してアジアのハンドボール界も、小さな芽がそこここにふき出した。
しかし、一九七一（昭46）年日本が招いたミュンヘンオリンピックアジア予選には、日本のほか韓国と、ヨーロッパから移籍してきたイスラエルの3ケ国が参加しただけで、むしろアフリカ、アメリカ大陸の動きのほうが活潑であった。
レバノン、クウェート、シリアなど西アジア地域諸国の活動はほとんど伝えられず、一九七二年の第14回IHF通常総会（ニュウルンベルグ）で、新設されたアジア選出理事として日本の渡辺和美氏の対立候補に突然レバノンの代表が立ったり、IHFの各技術会議にクウェートが常に代表を派遣しているなど、競技面での動きだけが目立った。

10年間で4倍に増加

こうしたことから日本協会もアジアハンドボール界の充実には、まだまだ年月がかかるとみていたのだが、中国が初参加した一九七四（昭49）年の第7回アジア競技大会（テヘラン）時、あっという間に、ハンドボールは同大会の19番目の競技として加えられ、同時にAHF（アジアハンドボール連盟）結成準備が始まった。
いくつかの曲折はあったが、AHFは昨年1月正式発足し、日本も6月に加盟届を提出した。
この間の流れの速さと、それにともなう実施国の増加は驚異的でいつのまに、各国にそれだけの態勢がととのえられていたのか、と思うばかりだった。
ちなみに10年前の一九六六年度IHF加盟36ケ国のうち、アジアは日本、韓国、シリアの3ケ国だけ（イスラエルはヨーロッパ所属）
一九七〇年度でさえ49ケ国のうち7ケ国（イスラエルを含む）にすぎなかった。
それが昨年度になると加盟65ケ国のうち13に伸びた。
しかも、待機中の3準加盟国のうち、2ケ国（バーレーン、アラブ首長国連邦）はアジアだ。正に急成長である。

活動はまだまだ初歩段階

さて、各国の実態はどうなのだろう。
3年半前、学究のためレバノンシリアなどを廻った藤本強・本誌前編集長（東大OB）によれば、当時この両国内でハンドボールのゴールポストはいちども見なかったそうだ。
IHFが昨年3月現在でまとめた各国競技人口調査でも、男子（成人）チーム数はホンコン26、ヨルダン16、韓国49、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）24、クウェート14、レバノン20、シリア42、キプロス6などとなっており日本の572とインドの300が他を圧している。
しかし、各国とも若いスポーツ・ハンドボールへの肩入れは相当なもので、特にアラブ諸国は熱が入っている。別掲のようにパン・アラブ競技大会種目に加えたし、すでに全アラブ選手権も3回開かれていると伝えられ、クウェートなどでは、国内リーグの模様が新聞にかなり大きく扱われている。
レベルのほうは、これらの国がほとんど友好国間だけの交流にとどまり、ヨーロッパ遠征などのデーターがないため見当がつかない
初交流かとみられた昨春のモントリオール予選(台北)では、直前になってクウェートが棄権しており、いぜんベールの向う側のまま
わずかに5年前の資料ではあるが、チェコのロコモティブ・ブルソビス・プラハという2部リーグのクラブがシリアに22―9、ヨルダンに24―14、クウェートに20―14、北朝鮮に22―19でいずれも勝った記録を唯一の〝対外記録〟として手に入れているだけだ。
ブルソビスが国際的にはほとんど無名で、しかも2部リーグ所属ということから、これらの国の実力はある程度、推測できよう。

実力的には日、中、韓か

ところみてくると第1回アジア選手権は、内容的にはまだまだのような気がする。
日本協会・荒川清美理事長も「選手権を争うというよりも勉強のために参加する、友好のために参加するという国が多いのではないか」と云う。
実力的には、やはり日本、韓国の〝実績組〟のほか、中国の攻守が抜きんでているとみられ、これに一歩遅れてパン・アラブの勝者シリア、クウェートというところだろう。
中国の登場は、アジアのみならず世界ハンドボール界の大きな注目を浴びることとなろう。
一九五〇年代後半から約10年間東ドイツ、ルーマニアなど東欧の強豪を招いて腕をみがき、日本（ナショナル）にも4連勝するなどしたが、文化大革命でその消息を

絶った。49年8月ヨーロッパのトップチーム・ティミソアラ工業学院（ルーマニア）を招いて復活を示し、そのあとユーゴナショナル、フランス軍隊選抜、フランスナショナルなどを次々と招待、つねに大観衆の前で国際試合を進め、文革以前の勢いである。

すでに一昨年秋の第3回全国競技大会でも実施され、中国スポーツ界の情報通によれば、従来の「五大球技（バスケットボール、サッカー、卓球、バレーボール、バドミントン）」の列に加わり「六大球技」となる日も遠くない、という発展ぶりだ。

主力は人民解放軍といわれ、なかでも「鉄道チーム」が強いという。

昨春、訪中したフランス軍隊選抜の関係者によれば、「中国の特色は、ゴールライン周辺での変化（筆者注・ポストプレー、カットインの多用か）と素早い動きにあり、バスケットボールのフォーメーションに似た連けいプレーが随所にみられる」そうだ。

ディフェンス技術は必しもよいとはいえないようだが、フランス軍隊選抜との第1戦で、フランスの速攻に面くらいながら、第2戦では、早くもその対応策が身についていた、といわれ、選手個々のセンスのよさ、指導力、研究心の高さは見落せない。

解放軍内でハンドボールが盛んなことは、強化にも大きな利点があるとみられる。

また、中国が復活後に示したアジアハンドボール界での働きは、実に精力的で、AHF結成や、アジア競技大会への参加に大きな力があった。

AHF推進したクウェート

AHFの推進力となったクウェートは、一九五九年に初めてハンドボールが伝えられた。連盟の創立は一九六六年。国内の充実が最優先されてきたが、一九七四年プラハ（チェコ）友好トーナメントに初参加、2位となって関心を呼んだ。

ジュニアを合わせ競技人口は約一万人、女子は行われていない。一昨年1月、クウェート国際トーナメントを開き、IHF首脳陣を招待、運営力のあるところを見せている。

シリアでハンドボールは「いちばん新しいスポーツ」と呼ばれる

一九五九年エジプトが同国で試合を行い、その二年後に連盟が生まれ、IHFへすぐ手続きをとった。このため、アジアにおけるIHF加盟国としてはかなり古株である。

パレスチナも協会もつ

日本協会がなんとか交流の糸口を見つけようと努力している朝鮮民主主義人民共和国は、一九七四年、IHF加盟にあたって、日本へも支援を依頼してきたが、その後、ハンガリーを招いたなどという風聞はあるものの詳しい動向は判らない。現在、男子のほか、女子に20の成人チームがある。

IHFには未加盟だがパレスチナ、イランも着実だ。

パレスチナは一九六四年ガザ地区で協会を設立、翌年のカイロ友好大会でデビュー、いきなり2位となったほか、一九六八年ソフィアでの青年友好大会にも参加した

いちちニュースが途絶えたが、現在はクウェート連盟内に本部を置き、イラク、シリア、レバノン、エジプト、リビアに支部があると伝えられる。

イランは、ごく最近、協会の発足にこぎつけた。首都テヘランは一九八〇年代にオリンピック招へいが噂されるだけに、今後の成長が期待される。

イラク、インドも意欲的

このほか、イラクは昨秋、IHF加盟国になったばかりだが、すべてに意欲的で、来年10月の第4回全アラブ選手権の開催地に決まっている。

インドは、学生が主体でいちどは今春4月の第1回世界ジュニアにもエントリーしていた。国内選手権なども活発のようで思わぬ実力を備えているかもしれない。

一九七三（昭48）年の第5回世界女子にいきなり出場を希望、IHFを面くらわせたことがある。

ホンコンは、6年前、台湾の関係者によって種が蒔かれた。男子に比べ、女子は9チームと少ない。インド同よう、大学チームが主で、日本学連の故西敏郎会長がいちち交流を働きかける動きをみせたが、実現せぬままに終っている。

韓国については、学生、高校社会人の3部門男女の交流で、互いの手の内までも判るほどの接触ぶりで、今さら説明の要はあるまい

ただ、高校界での伸びに比べ学生・社会人層への普及が意外にはかどらず、関係者も頭を痛めているようだ。昨秋、協会首脳陣の充実が企られ、積極的な手が打たれはじめた。それだけに〝打倒日本〟の闘志も高まっていよう。

オセアニア地域から初めて名乗りをあげたオーストラリアは、いまのところアジアとは無関係だがIHFは準加盟国としたのを機にアジア――オセアニアの接近を望んでいるようだ。

余談だが、フランスが日本を滞同して来年4月、オーストラリアで国際試合を企画、日本協会も乗り気である。

シリアが強味示す

パン・アラブ競技大会

第5回パン・アラブ競技大会は昨年11年ぶりに復活、10月4日から19日間19競技にわたってシリアの首都ダマスカスで行われた。

ハンドボール（男子）は今回初めて採用され7ケ国によるリーグ戦の結果シリアが本命と見られたクウェートを破り金メダルを獲得した。主な記録次のとおり。

シリア	24—17	バーレーン
クウェート	25—18	ヨルダン
エミレート（アラブ首長国連邦）	19—13	サウジアラビア
モロッコ	41—19	エミレート
サウジアラビア	18（分）18	ヨルダン
シリア	36—11	エミレート
シリア	17—12	モロッコ
バーレーン	36—21	エミレート
クウェート	22—19	サウジアラビア
バーレーン	24—18	モロッコ
シリア	30—21	ヨルダン
モロッコ	28—20	サウジアラビア
クウェート	29—23	バーレーン
ヨルダン	19—18	バーレーン
シリア	29（14—15 15—8）23	クウェート

【順位】①シリア②クウェート③ヨルダン④バーレーン⑤エミレート⑥モロッコ⑦サウジアラビア

世界へはばたけ日本のハンドボール

（協賛者御芳名・順不同）

若手審判員養成

JHAレフェリーコース（20～25才）開設

国際級審判員育成

つぎつぎと新しい構想・企画を打ち出し拡充の一途をたどる日本協会審判部が、こんどは若手養成のための「JHAレフェリー・コース」を実現させる。

発表された要項によれば「将来ともレフェリーとして活躍しようとする意志をもつ若人に、レフェリーとして必要な課程を教育し、秀れた人材を得ようとするもの」で、20才以上、25才未満（男女）を参加資格としている。大学在学中の人も受けられるのが特色。

コースは全6日間で、前期（3日間）、後期（3日間）に分かれ第1回の前期は今春3月26、27、28日東京・岸記念体育会館会議室などで行われ後期は今夏8月下旬。約30人の受講が予定される。

コースの課程は前期が「ハンドボール競技規則(10単位)」「審判に関する留意事項Ⅰ・Ⅱ(6単位)」「復審判に関する規範(4単位)」「審判技術～判定・動き・態度などの実際～(20単位)」。

後期が「競技の運営(4単位)」「日本協会公認審判員規定（4単位)」「スポーツにおけるレフェリーのありかた(6単位)」「審判技術～判定・態度・動きなどの実際～(10単位)」となっている。

一単位は30分で、前後期合わせて64単位（32時間）。

各教科の必要時間数（単位）を受講したあと、テストを受け合格した時に認められる。この課程を修了し、全単位を取得した者は所定の手続きのあと日本協会公認審判員のB級ライセンスを得ることができる。

若い審判の養成と人材の発掘はかねてからの課題で、その実践について研究をつづけていた審判部が、日本協会発足40周年を前に踏み切った今回のコースは、それだけに自信に満ちた内容であり、大きな成果が期待されている。

また、このようなコースの設定で、これまでは第一線競技者として活動ができなくなった者が審判界へ、という道が圧倒的に多かったが、今後は、いきなり審判界での活躍を目指す若手が増えると予想され、ヨーロッパでみられるような、ハンドボール競技者(選手)としては経験が浅くても、「審判員」に魅力を感じて飛びこもうとする人にも初めて本格的な門戸をあけたことになる。

国際級レフェリーの育成も急務と云われ、審判部では、このコースからそうした人材を輩出させようと意欲的で、後期の課程に特別教科として「外国語（英・独・仏のいずれか一つ)」を設けている。

ちなみに現在、日本協会の国際公認審判員は3名にすぎない。

なお、参加資格は、55年度までは35才未満まで枠が拡げられている。

参加したコースにおいて未取得単位（欠席、不合格など）があった場合は、次回（連続）のコースで再度受講しテストを受けることもできる。

ただし、連続の受講でない場合には、前に取得している単位は無効になる、とされている。

日本協会の公式事業で英文略称の「J・H・A」を採用したのは今回が初めて。

急げ強化部門の人事

有給の総務担当コーチも

日本体協競技力向上委員会は、かねてから検討していた「オリンピック選手特別強化事業」を今春4月から本格的にスタートさせることを決め、オリンピック種目競技団体（27団体）と、協議を進めている。

この事業は新設の「オリンピック特別強化委員会」によって取り組まれるもので、52年度予算約3億円のうち、すでに1億8千万円の国庫補助が確定している。

基本的な方針は、有給総務担当コーチ、強化担当コーチ、トレーニングドクターを各競技団体に配置して、一九八〇(昭55)年のモスクワ、レークプラシド（冬季）両オリンピックに入賞が期待できる競技を強化、チームやコーチの内外での交流、スポーツ科学研究事業を推進させる、としている。

◇　◇　◇

日本協会では、3月20日に執行部の改選が行われることから、日本体協の新しい〃オリンピック強化路線〃を支持するものの、具体的な動きは、本誌〆切り（3月10日）までに、ほとんど行なわれていない。

競技力向上委と接触している渡辺慶寿常務理事（技術部長）も、日本体協の意気ごみに比べ、日本協会の態勢の遅れにやきもきしながら、身動きできない、といったところが実情のようだ。

総務担当コーチ（強化実務の処理をうけもつ・月額10万円支給）の推せん〆切りが3月26日までと伝えられており、昨秋の全国代議員会で承認を得ている「強化対策委(仮称)」も、3月内には発足させないと、すべて後手々々に廻りかねない。

昨秋に示した荒川構想では、「強化対策委(仮)」はヤング全日本を含めたナショナルの強化いっさいを行い、「技術委」は、日本体協の公認スポーツ指導者制度とマッチするようなセクションと、日本ハンドボール界全般の技術向上について受けもつセクションの二つを含む、という。

技術委も、公認コーチ制度など解決すべき課題を山ほどかかえるが、それより何より強化対策委（仮）は、来年2月に男子、同11月に女子のそれぞれ世界選手権を控えており、男子は年内にアジア予選開催が迫っている。

スタッフの編成に、もし手間どるようだと、日本体協とのバランスが崩れるだけでなく、それだけナショナルチームの活動も遅れ、不充分なままに世界選手権を迎えなければならなくなる。

モントリオール以降、話し合いのないままに過した約8カ月の〃強化の空白〃を、3月末の10日間程度で一気に埋めることができるかどうか。

新執行部はスタートと同時に、極めて精力的な動きを、いや応なしに求められることになりそうだ

単独チームでは史上初

湧永薬品，欧州へ遠征

ブルガリアなどで8試合

今年度の男子日本チャンピオンチーム・湧永薬品(広島)は、新シーズンを前にした強化策の一環として、史上初めて単独チームのヨーロッパ遠征を実現、湧永儀助団長(同社副社長)ら役員3、選手14名が3月4日夜東京から元気に旅立った。

湧永薬品は、昨年12月の第28回全日本総合選手権で4年ぶりに優勝、今年度の活躍が期待されているが、いっそうの飛躍と充実を目指してヨーロッパへの強化遠征を企画、オーストリア、西ドイツ、ユーゴ、ブルガリアの4ケ国で各2試合、計8試合を行うことがまとまったものである。

対戦チームは、名門クレムス（オーストリア）をはじめ各国のトップクラスとみられる。

日本の単独チームがヨーロッパへ遠征するのは初めてのことであり、木野、穂積の両オリンピック選手を中心に、国際的にもかなりの実力とされているだけに、今回の成果を日本協会筋も注目している。筑波大（前・東京教大）のGK須波雅人選手が特別参加するのも話題。

なお、湧永薬品は46年6月に韓国遠征（3戦）を行っている。来日したヨーロッパチームとは48年ユーゴナショナルに14―28で敗れているが、48年4月のFA・ギョッピンゲン（西ドイツ）には21―17、51年のドロット・ハルム・スタート（スウェーデン）には25―19で勝っている。帰国は3月26日夜の予定。

【湧永薬品欧州遠征メンバー】▽団長　湧永儀助(湧永薬品副社長、関学OB)▽チームリーダー　村中明郎（部長、前監督、関学OB）▽監督　市原則之（広島修道大OB）▽選手・GK今井敏之、福井秀人、須波雅人～特別参加～FP津川昭(全日本)、木野実(全日本)穂積豊彦(全日本)、緒方嗣雄（旧姓・森)、高橋益夫、戸田栄一、藤本康生、松本義樹、山本伸一、戸田政弘、松井正敏。

企業チームならではの企画

□……大きなニュースである。単独チームの欧州武者修行はこれまでにも何度か企てられながら、その都度立ち消えになっている。周到な準備が要るからだ。

それだけに、短期間に話を具体化させた湧永薬品の意気ごみに敬意を表したい。

しかも、今回の対外交渉は、日本協会ルートを一切わずらわせずすべて自チームで切り開いたもので文字どおりの〝単独国際交流〟。

規程では、ヨーロッパなどへの遠征は6ケ月前に、届出なければならないが、日本協会もその熱意を汲んで1月付の申請を了解している。

市原監督は「ヨーロッパのパワープレーやミスの少ないプレーを身につけて来たい。将来、ヨーロッパカップに出場できるようなチームを造るためにも、この遠征は参考になるだろう」と意欲的。単独チームが本場に乗りこんでどこまでやれるか。思い切った試合ぶりを期待したい。

ところで、今回の過程を見ていると交渉面をはじめ随所に企業チームならではのセンスがうかがわれる。

チーム外の若い有望選手に勉強の機会を与えるため滞同させる、というのも、遠征中の補強につながるし、一石二鳥の好アイデアだ。

こうした〝新しさ〟が、これからの日本ハンドボール界には、是非必要で、湧永の欧州遠征は、いろいろな意味で評価されていい。

受け入れ側にしても、一国のチャンピオンチームとなれば、看板に不足はないし、今回のツァーはすべてスムースに行きそうだ。ブルガリアに日本チームが訪れるのは初。

（杉）

湧永に関西スポーツ賞

関西運動記者クラブの選定する「第20回関西スポーツ賞」にこのほど、湧永薬品が選ばれ、2月28日大阪で他の4団体、5個人とともに表彰を受けた。

西ベルリンから男女チーム来日

日本協会は、アジアへの観光旅行の途中、日本で親善試合をという西ドイツのBSC・リデベルゲを中心とした男女チームの希望を受けいれることになり、3月19日京都府立体育館、26日東京調布市国領の東京重機体育館で男女各2試合づつを行う。

主力のBSC・リデベルゲは、男子が西ドイツ3部リーグともいうべきベルリン地区リーグに所属女子は全国リーグの下に位置するベルリン地方リーグに加っており、このランクからすれば、女子はなかなかの強豪と云える。

あとホンコンでも試合の予定という。ヨーロッパの女子チームを迎えるのは48年9月のOSC・ラインハウゼン(西ドイツ)以来のことである。

○……試合日程……○

▽3月19日15時(女)対大和銀行、16時20分(男)対京都オールスター（京都府立体育会館）

▽3月26日15時(男)対大崎電気、16時30分(女)対東京重機・大崎電気混成軍（東京重機体育館）

名古屋でアジア大会か

5年後の誘致へ動く

3月9日付で一部の報道機関が伝えるところによると、名古屋市が昭和57年(一九八二)開催予定の「アジア競技大会」の誘致に動き出したことが明らかとなった。

3月8日の名古屋市議会本会議で市側から説明されたもので、なお流動的だが今後の動向が興味深い。

ハンドボールは、3年前のテヘラン大会の時に、実施種目に加えられているが、来年のバンコク（タイ）大会での採用は望みうす。もし、名古屋大会が実現すれば、ハンドボールは同市のもっとも得意とするスポーツの一つだけに、初採用が有力となろう。

実業団トーナメント

トヨタ車体（愛知）の2連勝成る

神戸製鋼再び惜敗

第8回全国男子実業団トーナメント（第17回全日本実業団選手権トーナメントの部）は、2月10日から13日までの4日間、横浜・平沼記念体育館を主会場に全国各地区推せんの29チームと自衛隊代表3チームの計32チームによって行われた。

近い将来に日本リーグ入りを目指しているチームが増え、いちだんと内容豊かになったが、決勝戦は2年つづけてトヨタ車体（愛知）×神戸製鋼（兵庫）となり、トヨタが後半なかばでの優位を活かし2連勝を飾った。

なお、例年この大会の上位2チームが全日本実業団選手権（日本実業団リーグ）との入れ替え戦に臨むが、来年度から大会方式を変更することになっており、その取扱いは未定とされた。

セ自動車、北陸電力かわす
三井石油岩国は延長で敗る

▽1回戦

トヨタ車体（愛知）18（8−5、10−5）10 出光徳山（山口）

川崎重工（兵庫）24（12−13、12−10）23 三井石油化学千葉（千葉）

丸善石油下津（和歌山）25（8−9、17−8）17 海上自衛隊鹿屋（鹿児島）

金沢市役所（石川）22（10−8、12−8）16 安田生命（東京）

日鉄建材（大阪）22（10−4、12−6）10 自衛隊古河（茨城）

セントラル自動車（神奈川）20（7−8、13−9）17 北陸電力福井（福井）

大阪ガス（大阪）25（8−11、17−8）19 日進商会（神奈川）

新日鉄名古屋（愛知）20（7−8、13−5）13 IHI呉造船

自衛隊勝田（茨城）21（11−11、10−5）16 住友銀行（大阪）

＝以上平沼記念体育館

大同特殊鋼高蔵（愛知）28（14−6、14−5）11 日本鋼管福山（広島）

二和家具（岐阜）21（8−10、10−8：2−1、1−1）20 三井石油化学岩国（山口）

大山商会（大阪）34（18−0、16−5）5 昭和電工（神奈川）

丸善石油松山（愛媛）28（17−8、11−8）16 日本原子力研究所（茨城）

日本発条（神奈川）32（16−3、16−7）10 日本碍子（愛知）

神戸製鋼（兵庫）棄権 日産石油千葉（千葉）

東京重機（東京）18（5−6、13−5）11 武田薬品光（山口）

＝以上三菱重工金港体育館

○……平沼会場ではセ自動車×北電戦が熱をおびた。セ自動車は15分3−0としたが、そのあと吉沢一人に頼るだけの攻撃だったため吉田、揚原らの北電に追いこまれ前半終了直前、逆転を許した。

後半、互角の戦況からセ自動車は10分すぎ根本、福田の速攻で優位に立ち25分19−14、逃げ切った。

金沢×安田は、安田が巧者揃いらしく、気負う金沢のスキをついて後半20分16−14とリードしたが疲れがのぞき、残り10分間にみせた金沢の速攻をかわせず逆転負けした。

川崎×三井石油は大乱戦。川崎が前半の劣勢をはねのけ後半15分19−15とすれば、三井もすぐに反撃、24分20−19と逆にリードした残り5分互いに激しい点のとりあいから川崎はタイムアップ寸前のPTを守屋が決めケリをつけた。

丸善×鹿屋は丸善が後半開始直後一気に主導権を握った。

○……三菱会場の二和×三井石油は一進一退から残り2分18−16とした二和の逃げ切りかとみえたが三井は土たん場で大村がシュートを決め、延長にもつれこんだ。

しかし、個人技に優る二和は延長後半3分21−19とし粘る三井を振り切った。

勝田×住友は、初出場の住友が牧野、江副の巧技で互角の試合運びを見せたが、地力に優る勝田は後半なかばからチームプレーが整い優勢となった。

重機×武田は後半、重機が見違えるような走りで圧倒した。

丸善石油下津が辛勝

▽2回戦

トヨタ車体 23（13−7、10−11）18 川崎重工

丸善石油下津 21（14−10、7−10）20 金沢市役所

セントラル自動車 25（13−9、12−7）16 日鉄建材

新日鉄名古屋 24（12−5、12−9）14 大阪ガス

＝以上平沼記念体育館

二和家具 20（10−5、10−6）11 自衛隊勝田

大同特殊鋼高蔵 14（5−2、9−5）7 大山商会

日本発条 17（6−4、11−9）13 丸善石油松山

神戸製鋼 10（3−2、7−4）6 東京重機

＝以上三菱重工金港体育館

○……平沼会場は丸善×金沢がもつれた。

速い展開からわずかに丸善が押し気味、後半10分18−13とした。

ところが、このあと一本調子となり17分間にPTで1点を加えただけという貧攻で、金沢の追いあげにあい26分19−19とされた。

27分丸善は善岡でリードしたが金沢も28分PTで同点、予断を許さなかったが、丸善は残り50秒、スカイプレーから松本が押しこんで決勝点とした。

この他の試合は順当な結着。

○……三菱会場は力の接近した4カードが並んだ。

二和×勝田は、勝田の切りこみとロングに二和の守備陣がまどわされることなく、逆速攻から巧みに点差をあげた。

大同×大山は後半10分9−5と予断を許さなかったが、大同は攻め口の多彩さで一歩先んじ制勝。

日発×丸善は最後まで動きの落ちぬ好試合となったが、日発はつねに先手をとりつづけた優位さがモノを云った。

神鋼×重機は後半3分、重機が同点とすべきPTを落としてから完全に流れは神鋼に傾き15分6−3、その差を巧くキープした。

日本発条、先制活きず
二和、大同高蔵に快勝

▽準々決勝

トヨタ車体 19（7−7、12−4）11 丸善石油下津

○……勝負のかかった後半、丸善は2分8−7とリードしたものの、そのあとトヨタの好守にあってなかなか追加点があげられず、無理な態勢からのシュートやパスをカ

ットされてトヨタに連続7ゴールを奪われてしまった。（森川利昭）

二和家具 19（10－6、9－4）10 大同製鋼 高蔵

○……立ち上り2－4から9分4－4に追いついた二和は、上背に優る利点を活かし、積極的な射ちこみで優位に立った。
　後半も同じようなペースで進み、大同は二和のつぶしの早い守りを攻めあぐみ15分15－7、ここで勝負が決まった。（森川）

神戸製鋼 25（9－6、16－7）13 日本発条

○……日発は北村、井上で10分まで先制していたが、神鋼は11分タイにしてから波に乗り20分7－2
　後半、神鋼はますます好テンポとなり山本、笹野、山崎らが1分おきにゴール、守りの固さもあって危気なく勝ち進んだ（後藤幸生）

セントラル自動車 17（10－6、7－5）11 新日鉄名古屋

○……動きの悪いセ自動車ディフェンスをついた新日鉄は10分までに竹上、平野が交互に得点、4－1としたが、セ自動車はしだいに立ち直り前半25分からの3点連取で主導権を握った。
　新日鉄は後半6分7－10としたが、そのあと相手GK吉田の堅守にあって、追いあげのチャンスをつかめなかった。
　セ自動車が後半なかばにみせた速攻、サイド攻撃による集中攻撃は鮮かだった。（後藤）

セ自動車の反撃及ばす

神戸製鋼は圧倒勝ち

▽準決勝

トヨタ車体 12（10－4、2－7）11 セントラル自動車

	得	【車体】	【セ自】	得
GK	0	遠山	吉田	0
GK	0	近藤		
FP	0	山田隆	羽毛田	0
FP	1	高橋	加藤	2
FP	2	松本	仲田	1
FP	6	宮松	根本	2
FP	3	横尾	福田	1
FP	0	牧	木村	0
FP	0	山口	吉沢	5
FP	0	荒木	中村	0
FP	0	大塚	高木	0
FP	0	山田透	真木	0
	12（1）	PT		（2）11

（審・高橋、内田）

○……セントラルの猛反撃で熱がこもったが、トヨタは前半の大量リードで辛くも逃げこんだ。
　前半のトヨタはカットイン、ポスト、スカイプレーなど多彩な攻撃でペースを奪い宮松、左腕・横尾らが着々加点、後半3分11－4と引き離した。
　しかし、そのあと中盤の動きが鈍り、逆にセントラルのミドル攻撃をうけて苦しい展開となった。
　セントラルは吉沢の連続4ゴールと加藤、仲田らで20分10－11、スタンドをわかせたが、21分PTを課せられて10－12、トヨタに一息つかせたのは惜しい。
　両チーム、波のはげしさはあったが、最後まで息のぬけぬ好試合だった。（松本正昭）

神戸製鋼 27（10－2、17－6）8 二和家具

	得	【神鋼】	【二和】	得
GK	0	大谷	竹中	0
GK	0	松原		
FP	2	河内	古川	3
FP	8	山本	斉藤	0
FP	1	中尾	長谷川	2
FP	4	須藤	伊丹	2
FP	4	笹野	岸見	0
FP	5	山崎	下村	1
FP	0	江口		
FP	0	赤嶺		
FP	2	柴田		
FP	1	藤谷		
	27（0）	PT		（1）8

（審・大橋、久保田）

○……二和は連戦の疲れからかディフェンスにまったく粘りがなく神鋼のリターンパスプレーを主とした組織攻撃と速攻に得点を許し前半25分10－2、大勢が決した。
　後半になっても神鋼の走力はおとろえず、意外の大差がついた。（後藤）

セ自動車、二和破り3位

▽3位決定戦

セントラル自動車 23（10－7、13－9）16 二和家具

○……決勝進出の望みを絶たれた両チームだが、特に連戦をギリギリの7人で戦い抜いてきた二和の動きは鈍かった。
　前半18分までは6－3とリードしていたのだが、24分逆転を許すと、攻守ともに動きがバラバラとなった。
　優位に立ったセ自動車は後半も根本、福田が鋭い動きで加点したが、ディフェンスはけっしてよいデキではなく、GK吉田に助けられる場面も多かった。（新木康稔）

神戸製鋼、押し気味実らず

▽決勝

トヨタ車体 12（6－7、6－4）11 神戸製鋼

	得	【車体】	【神鋼】	得
GK	0	遠山	大谷	0
GK	0	近藤	松原	0
FP	6	宮松	江口	0
FP	2	横尾	河内	2
FP	0	牧	山本	5
FP	1	山田隆	笹野	4
FP	0	荒木	中尾	0
FP	2	高橋	須藤	0
FP	0	近藤	赤嶺	0
FP	0	松本	藤谷	0
FP	1	山口	柴田	0
FP	0	山田透	山崎	0
	12（2）	PT		（1）11

（審・大橋、久保田）

○……前年と同じ顔合せ。互いに相手の手の内を知りつくしている感じで、勝負の岐れ目はプレーの正確さにかかった。
　ところが、両チームとも似たりよったりの展開で、先行しようとする意識が強すぎ、プレーがまとまらない。
　パスコースを読み合っては逆襲という場面を繰り返し後半6分8－8。
○……このあとトヨタが巧妙なプレーをみせた。
　神鋼のパスをインターセプトした山田隆が、そのまま進んでもシュートは無理とみて、強引に中央へ切りこんで相手の激しい当りを誘いPT、宮松が決めたのだ。
　押されつづけていたトヨタにとってこの1点（9－8）は大きくそれだけに山田隆の判断が光った
　勢いづいたトヨタはこのあとPTを含む2点を加え15分11－8。
○……しかし神鋼も負けてはいない。セットから相手を切り崩すのが難しいとみるや、15分すぎ得意の速攻から山本、河内が連取、あっと云うまに同点（11－11）とした。
　再び、重苦しいムードとなって時間が経過したが、トヨタは残り56秒、宮松が右45度からシュートを決め、そのあと2回の神鋼の攻撃をかわして2連勝を決めた。
　試合の大半を支配しながら、後半なかば、僅かなことで追う立場にされた神鋼にとっては悔しさの残る試合ではなかろうか。（杉山　茂）

山田透・トヨタ車体監督の話
決勝戦はウチにしてはすべて巧くいきすぎました。この大会になると不思議に調子が出るようです。
　去年の優勝で、どうにかかっこうだけはついてきましたが、2連勝の自信などありませんでした。
　内容的にもまだ不充分な点が多く、チームワークで勝てたようなものです。
　来シーズンは11人の新人が加わる予定で、日本リーグ勢との力の差を一日でも早く詰めたいと思っています。

◆年次優勝チーム ①（昭44）宗形製作所（大阪）②湧永薬品（大阪）③住友化学菊本（愛媛）④大山商会（大阪）⑤・⑥日新製鋼呉（広島）⑦・⑧トヨタ車体（愛知）

大和銀行、劇的な昇格

～日本リーグ入れ替え戦～

男子で三菱レ大竹も

昭和51年度日本リーグ男女入れ替え戦は3月5、6の両日名古屋のプラザー工業体育館で、男子は日本リーグ7、8位の日新製鋼呉（広島）と三陽商会（東京）が、新加盟希望の神戸製鋼（兵庫）、三菱レイヨン大竹（広島）、女子は8位の東北ムネカタ（福島）が、大和銀行（大阪）の〃挑戦〃をそれぞれ2回戦制で受け、男女とも1チームづつ入れ替る大波乱を呼んだ。

特に女子は大和が第2戦後半15分からの大逆転という劇的な〃昇格〃だった。

日新製鋼呉、辛くも残留

▼男子・第1戦

三菱レイヨン大竹（広島） 10（6−3、4−6）9 三陽商会（東京・NHL⑧）

【三陽】（審・西川 河野）

位置	選手	得
GK	吉近	0
GK	田村	0
FP	田中	5
FP	近森	1
FP	鵜沢	1
FP	石原	0
FP	稲木	1
FP	緒方	1
FP	竹村	0
FP	梅屋	0

【三菱】

位置	選手	得
GK	藤本	0
GK	中嶋	0
FP	大江	2
FP	善本	4
FP	大林	2
FP	岡村	2
FP	武田	0
FP	岩本	0
FP	田中	0
FP	重村	0
FP	沖重	0

10（1） PT （3）9

日新製鋼呉（広島・NHL⑦） 27（12−4、15−7）11 神戸製鋼（兵庫）

【神鋼】（審・川島 浅田）

位置	選手	得
GK	大谷	0
GK	松原	0
FP	河内	1
FP	山本	2
FP	中尾	0
FP	笹野	4
FP	須藤	1
FP	山崎	2
FP	柴田	0
FP	藤谷	0
FP	赤嶺	1
FP	江口	0

【日新】

位置	選手	得
GK	三田	0
GK	佐野	0
FP	脇若	0
FP	徳田	10
FP	大庭	4
FP	下茂	7
FP	吹上	2
FP	関本	0
FP	松木	0
FP	吉田	1
FP	村川	3
FP	湯中	0

27（2） PT （1）11

▽同・第2戦

三菱レイヨン大竹 21（11−6、10−6）12 三陽商会

【三陽】（審・長谷川 朱宮）

位置	選手	得
GK	吉近	0
GK	田村	0
FP	近森	0
FP	田中	5
FP	竹村	0
FP	稲木	1
FP	緒方	1
FP	石原	2
FP	梅屋	0
FP	鵜沢	3

【三菱】

位置	選手	得
GK	藤本	0
GK	中嶋	0
FP	善本	5
FP	岩本	0
FP	岡村	4
FP	大林	3
FP	大江	9
FP	武田	0
FP	重村	0
FP	田中	0
FP	沖重	0

21（1） PT （2）12

神戸製鋼 19（10−9、9−8）17 日新製鋼呉

【日新】（審・森 川島）

位置	選手	得
GK	三田	0
GK	佐野	0
FP	松木	2
FP	村川	1
FP	吹上	0
FP	下茂	4
FP	脇若	1
FP	吉田	1
FP	大庭	2
FP	関本	1
FP	徳田	5
FP	湯中	0

【神鋼】

位置	選手	得
GK	大谷	0
GK	松原	0
FP	江口	2
FP	河内	1
FP	山本	4
FP	山崎	6
FP	須藤	5
FP	笹野	1
FP	赤嶺	0
FP	藤谷	0
FP	中尾	0
FP	柴田	0

19（3） PT （2）17

1勝1敗。2試合の得点合計44−30で日新の残留が決定

ムネカタ、痛いPT失敗

▼女子・第1戦

東北ムネカタ（福島・NHL⑧） 10（4−2、6−6）8 大和銀行（大阪）

【大和】（審・浅野 細井）

位置	選手	得
GK	中尾	0
GK	河野	0
FP	東納	0
FP	岡村	1
FP	宮本	6
FP	清水	0
FP	富家	0
FP	義川	0
FP	内海	1
FP	楊枝	0
FP	田中	0
FP	内海	0

【東北】

位置	選手	得
GK	熱海	0
GK	海村	0
FP	遠藤	0
FP	有賀	3
FP	清水	3
FP	本郷	2
FP	近内	2
FP	鈴木郁	0
FP	谷薫	0
FP	郷	0
FP	鈴木英	0

10（0） PT （4）8

▽同・第2戦

大和銀行 7（2−1、5−3）4 東北ムネカタ

【東北】（審・角 森）

位置	選手	得
GK	熱海	0
GK	海村	0
FP	遠藤	0
FP	有賀	3
FP	鈴木郁	0
FP	清水	1
FP	本郷	0
FP	内近	0
FP	鈴木栄	0
FP	薫谷	0
FP	郷	0

【大和】

位置	選手	得
GK	中尾	0
GK	河野	0
FP	宮本	3
FP	内海	0
FP	増永	1
FP	富家	3
FP	清水	0
FP	岡村	0
FP	義川	0
FP	東納	0
FP	茶野	0
FP	楊枝	0

7（1） PT （0）4

1勝1敗。2試合の得点合計15−14で大和の昇格が決定。

○……全試合さすがに熱がこもった。3カードのうち入れ替えのなかった日新×神鋼戦さえも試合としては1勝1敗、実業団Bグループの充実を示した。

三菱×三陽。第1戦は三菱が5点をリードしながら3人連続の反則退場者を出すラフプレーで苦戦同点とされたが、残り30秒大江が貴重な決勝点をあげた。

第2戦は三陽が巧く滑り出したが大黒柱・近森が足を負傷して動きが悪くなり、前半16分逆転を許してから、追いつけなかった。

○……女子は大激戦。東北は第1戦をモノにしたものの後半9分6−3の有利を追いあげられるなど不安をのぞかせ、大和に自信を与えたのが、結果的には敗因となった。2回戦制では突きはなせる時に徹底的に加点しておかなければいけない。

それにしても大和の粘りはみごと。第2戦の後半15分、通算得点で12−14と苦しかったのだが、そのあとディフェンスの健斗で東北に追加点を許さず、19分14−14（通算）と待望のタイ、そして23分のPTを宮木が決めて逆転。感激のリーグ入りを決めた。

東北は前後半1本づつのPTを落としたのが痛い。

男子、広島から3チーム

入れ替え戦の終了により、第2回リーグの参加男女各チームが決まり前期6月11日～7月17日、後期10月9日～11月27日の日程も確定した。男子は広島から3チームの出場となる。

急成長の新進・大和銀行（大阪）

日本リーグ入れ替え戦から

□……不運にも〝権威の座〟をあけわたしてしまった三陽商会と東北ムネカタには申しわけない表現になるが、初の入れ替え戦の結果男女一チームづつの新顔を迎えたことは、日本リーグにとって大きな意味がある。

　これで、第2回リーグの順位争いはますます熾烈となり、特にB級チームへ刺激を与えることになる。リーグ加盟を目指すクラスにも励みになったろう。

□……三菱レ大竹は32年創部、すでに20年の球史をもつ実業団きっての古豪で、もともと実力は充分

　リーグ発足にあたっては第3ランクにノミネートされていたし、昨年5月の日本実業団リーグ（全日本実業団選手権）では6位を占めている。

□……対照的なのが大和銀行。46年6月発足という新進で、球界でも、まだなじみがうすい。

　チーム関係者もまさか、こんなに早く日本リーグ入りを果たせるとは思わず、殿水幸雄部長の感想も「えらいことになりました」と勝者の弁というにはほど遠い。

　つい7ケ月前に行われたリーグ加盟第8チーム決定戦ではジャスコ（三重）に6―24で完敗しているのだから、ムリもない。

□……大和銀行誕生のいきさつがまた面白い。当時、営業の外交にたずさわっていた殿水氏の得意先の一つに男子のトップチーム・湧永薬品（大阪）があった。

　「ハンドボール部をつくりなさいよ」という湧永関係者のすすめで、「ハ」の字も知らない殿水氏が、独力で行内から人を集め基礎づくりをしたのだ。

□……中出盛雄、深江幸次郎といった関西球界の生んだ往年の名手による指導や、木野をはじめ湧永勢の助言もあって、シーズンごとに体裁が整い、昨年12月の全日本総合選手権に初出場できた。これが選手たちを発奮させ、週3回の定期練習日以外にも、自主的にコートへ集る顔が増えた。

　いい意味での〝欲〟がでてきたのである。

□……入れ替え戦には「下から追いかけてくるチームのあることを知ってもらうため」（殿水氏）というだけの理由で出たのだが、選手たちの胸中は〝参加〟だけでは我慢できないところまで盛り上っていた。

　GK中尾は、右ヒザうしろの筋を切りながらプレーをつづけ、昇格のかかったPTを気力で止めた

□……ハンドボールのとりこになり、スポーツによる人造りを目指した殿水氏にとって、選手たちのみせたこの日のファイトは、日本リーグ入りを遂げた〝結果〟よりも、もっともっと嬉しかったのではなかろうか。（S）

世界学生選手権

ルーマニア3連勝、日本は8位に

第7回世界学生選手権は1月10日から16日までの7日間、ポーランドのワルシャワ、タルノフ両市に日本（中沢重夫団長ら役員3、選手16）など10ケ国が参加して行われ、ルーマニアが3連勝の偉業を遂げ、3度目の出場をはたした日本は8位だった。

大会直前、棄権する国が続出し競技法式の変更などあったが、日本の6位以内進出有望は変わらぬと見られた。しかしチュニジア戦を激戦の末に落として望みを絶たれ、7位をかけたブルガリア戦も惜敗結局8位に終った（前回は10位）。

第8回大会は明後年（一九七九）一月開かれる予定。場所は未定。

ルーマニアと互角の激戦

予選リーグB組

日本の第1戦（遠征第10戦）、ポーランドとの試合は1月10日午後4時45分からの開会式に引きつづき、タルノフで行われた。審判＝ミラン、ミオドラク（ユーゴ）。

ポーランド 36（18−11、18−9）20 日本

得	【ポーランド】		【日本】	得
0	ヘンリャク	GK	岡部	0
0	ボイサク	GK	小松	0
3	ラク	FP	関	7
1	ラムチコワスキー	FP	西窪	2
3	チェスラ	FP	生駒	5
4	ブルゾゾウスキー	FP	洞ケ瀬	1
4	ブルジビロ	FP	千葉	2
8	コジェク	FP	泉	3
1	ブドビアルスク	FP	大西	0
4	グミレク	FP	勝地	0
4	チェシルスキー	FP	鈴木	0
4	ソイキン	FP	後川	0
36	(6)	PT	(2)	20

○……開会式直後の一戦、日本に固さはみられずディフェンスにやや乱れはあったものの11分4−6と互角の立ちあがりだった。

しかし、4人のオリンピック選手と3人のナショナルプレイヤーによってレギュラーメンバーを組むポーランドは、日本ディフェンスの中へ強引に入っては早目々と射ってでて点差をあけた。

また、速攻も日本のお株を奪うようなプレーで、特に20分7−13から一気に5点をたたみこまれたのが致命傷だった。

後半に入っても、ポーランドは攻撃の手を休めず速攻、サイドシュートで着々と加点、10分23−12と大差がついた。

日本も関、生駒らのロングで対抗したものの、ポーランドの理詰めの攻防とは差があり、大敗となった。

再三のリード空し

日本の第2戦・ルーマニアとの試合は11日午後6時30分からタルノフで行われた。審判＝スパゾフテルニスキー（ブルガリア）

ルーマニア 24（13−10、11−9）19 日本

得	【ルーマニア】		【日本】	得
0	オルバン	GK	岡部	0
0	バシラシェ	GK	酒谷	0
5	ドラガニータ	FP	西窪	2
4	ストックル	FP	関	3
1	グラボフスチー	FP	生駒	7
0	ミロニウク	FP	洞ケ瀬	4
0	フォルカー	FP	坪子	1
10	ボワナ	FP	後川	1
1	ステフ	FP	泉	1
0	チェル	FP	大西	0
2	タッセ	FP	北野	0
1	ディアク	FP	鈴木	0
24	(5)	PT	(1)	19

○……3連勝を狙うルーマニアに対して日本は一歩も引かぬ健斗で後半24分18−19と食い下り場内（観衆千六百）を沸かせつづけた。

しかし残り5分体力にまさるルーマニアは日本のディフェンスを引きずるようにして攻めこみ、26分ストックル（188cm、オリンピック代表）、27分ボアナ（185cm、同）28分ディアク（189cm）と決定的な3点をもぎとり、日本は無念にもねじ伏せられた。

○……日本の動きは立ち上りから実に快調、2分西窪の巧技で先制し、そのあとリードを奪われてもすぐに取り戻し、しかも途中、前日の千葉につづき、西窪が負傷で退場しながら、20分生駒で、7−6、24分生駒で8−7、28分洞ケ瀬で9−8と先行した。

だが、ルーマニアは劣勢に立つと反則気味の突進で攻め、ハーフタイム直前、11−9と逆転した。

○……日本は、後半6分PTなどで11−14とされたがひるまず、積極的に射ち16分1点差（15−16）。そのあと一進一退となり、期待をもたせたのであるが…。

それにしても、日本はディフェンスの出足のよさと、バラエティに富んだ攻撃によって、本当によく戦ったと思う。

ルーマニアは、日本の攻撃を何とか防ごうとしたが、最後まで策を見つけ出せぬ苦戦で、勝敗を色分けたのは、10cm以上もある平均身長差だけ、と云ってよい。

日本学生にとって史上特筆すべき最高内容のゲームであった。

スペインなど6ケ国不参加

大会は当初14ケ国参加と発表され（＝本誌148、149号参照）、そのあとメキシコ、イタリアが届出、いったんは16ケ国（4ケ国4組の予選リーグ）のフルブックスとなった。

ところが、年明け、大会直前になってスペイン、西ドイツ、オランダ、イスラエル、メキシコ、イタリアの6ケ国が参加をとりやめたため、急きょ、競技法式も5ケ国2組の予選リーグ、各組同位で順位（1〜10位）決定戦と変った。

不参加の理由は明らかとされず、またベルギーも最終日を待たずビザが切れ帰国してしまった。

響いた7本のPT失点

日本の第3戦・チュニジアとの試合は13日午後6時30分からタルノフで行われた。審判＝スゼンドレイ、ソメジェイ（ベルギー）

チュニジア 23（10−15、13−6）21 日本

得	【チュニジア】		【日本】	得
0	ブーディナ	GK	岡部	0
0	エル・ガイド	GK	小松	0
9	ランドルシ	FP	泉	1
3	デグエチ	FP	生駒	5
0	アマラ	FP	洞ケ瀬	4
2	シェルギー	FP	関	6
2	ムーサ	FP	坪子	0
4	シャブショブ	FP	西窪	2
0	グレンサ	FP	後川	0
2	マオウィ	FP	千葉	2
0	ブーカリス	FP	大西	1
1	ハフシ	FP	鈴木	0
23	(7)	PT	(0)	21

○……宿願の6位内入賞を遂げるには、どうしても勝たねばならぬ一戦。2分洞ケ瀬のカットイン成功で幸先よいスタートを切ったが10分過ぎ洞ケ瀬、生駒、関とたてつづけに退場を課せられてリズムを崩し25分9－5とリードを許した。

しかも、この間に6本のPTをとられ4失点したのは痛い。

後半、気をとりなおした日本はディフェンスの立ちなおりから反撃のチャンスをつかみ生駒の連続ゴールや、千葉、関の活躍で21分ついに17－17に追いついた。

○……これで、完全にペースを取り返したと見えたが、その直後、関が5分間の退場をくい、23分のPTは止めたものの、4分のPTで18－17と先行され、調子づいたチュニジアは、オリンピック選手デグエチ（194cm）の好配球からムーサ、ランドルシ、マオウィらが連続得点。日本は惜しいところで振り切られてしまった。

いささか納得のいかぬレフェリング（被PT12）とあって、あとあじのよくない一戦だった。

ベルギーから不戦勝

日本の第4戦は14日タルノフでベルギーと行われる予定だったが同国が前日夜、帰国したため不戦勝となった。

なお、大会当局は、この試合の記録を「日本5－0ベルギー」と発表している。

◆B組このほかの試合

チュニジア 26（15－9, 11－7）16 ベルギー

ルーマニア 44（24－9, 20－2）11 ベルギー

ポーランド 27（9－10, 18－7）17 チュニジア

ポーランド 34（20－8, 14－2）10 ベルギー

ルーマニア 29（14－8, 15－3）11 チュニジア

ルーマニア 25（13－12, 12－10）22 ポーランド

【B組順位】①ルーマニア4戦全勝②ポーランド3勝1敗③チュニジア2勝2敗④日本1勝3敗⑤ベルギー4敗。

▽B組個人得点5傑①ミロノビック（ルーマニア）29 ②コジエル（ポーランド）23 ③ドラガニト（ルーマニア）22 ④グミレク（ポーランド）21 ⑤ランドルシ（チュニジア）20

◆予選リーグA組の記録

ソ連 29（14－11, 15－10）21 ハンガリー

ユーゴ 36（19－7, 17－5）12 アルジェリア

ハンガリー 29（15－14, 14－14）28 ユーゴ

ソ連 26（11－12, 15－11）23 ブルガリア

ソ連 30（16－10, 14－8）18 アルジェリア

ユーゴ 25（13－11, 12－10）21 ブルガリア

ハンガリー 30（17－11, 13－10）21 アルジェリア

ブルガリア 22（10－8, 12－10）18 アルジェリア

ユーゴ 30（14－12, 16－14）26 ソ連

ハンガリー 28（17－11, 11－17）28 ブルガリア 引き分け

【A組順位】①ユーゴ3勝1敗（得失点差31）②ソ連3勝1敗（19）③ハンガリー2勝1分1敗④ブルガリア1勝1分2敗⑤アルジェリア4敗

▽A組個人得点5傑①ボグダン（ソ連）34 ②パピセビッチ（ユーゴ）28 ③ミルヤク（ユーゴ）26 ④チガレフ（ソ連）・モルナー（ハンガリー）25

7・8位決定戦

日本（B組4位）とブルガリア（A組4位）の顔合せにより16日午前10時30分からワルシャワ体育大学体育館で行われた。

ブルガリア 26（12－12, 14－13）25 日本

【日本】		得
GK	岡部	0
	小松	0
FP	関	5
	千葉	2
	泉	6
	生駒	4
	洞ケ瀬	4
	長野	4
	鈴木	0
	後川	0
	勝地	0
	大西	0
PT		(0) 25本

○……ブルガリアは予選A組で4位に終ったとはいえ、ポスト、サイド攻撃に鋭さがある。

日本も最終戦とあって斗志を燃やし、1分泉の先制ゴールに始まり、たえず先手をとりつづけ、20分30秒千葉のシュートで12－9と初めて3点のリードを奪った。

しかし、ブルガリアはポストプレーから日本ディフェンスを乱し24分11－13から連続3点、逆にリードする巧さを見せた。

○……後半、日本は長野、生駒で追いあげ11分30秒洞ケ瀬で18－18としたが、そのあとどうしても先行点がとれず、4度同点から21分21分50秒に手痛い失点があり22－24、いったんタイの場面もあったが、あと一押しが足りず28分24－26、残り1分関のゴールで25－26と迫りながら、ブルガリアの逃げ切りを許した。

攻撃の多彩さでは、はるかに日本が上廻ったが、ブルガリアには勝負どころでのたくましさがある。また、この日も日本はPTを10本課せられ、そのうち9本を決められたのが敗戦につながった。

ユーゴ、猛追も及ばず

1～10位を決める各試合は、1月16日ワルシャワで行われ、優勝をかけたルーマニア×ユーゴは、ルーマニアが前半、迫力に満ちた攻撃で4点のリードを奪い、終盤のユーゴの反撃をかわして3連勝を決めた。

有力とみられたソ連はA組で惜しくも2位、3位決定戦では地元ポーランドに名を成さしめた。

予定されたアルジェリア×ベルギーの9・10位決定戦はベルギーの棄権で行われなかった。

▽5・6位決定戦

ハンガリー 32－22 チュニジア

▽3・4位決定戦

ポーランド 21（10－7, 11－11）18 ソ連

▽決勝

ルーマニア 28（13－14, 15－11）25 ユーゴ

全日本学生代表

- 団長　中沢　重夫　全日本学連理事長
- 監督　三沢　澄　早大OB
- コーチ　一宮　昌平　日体大コーチ

		氏名	学校・学年	身長	得点
GK	①	岡部　大	明治4	182cm	0
	⑫	酒谷　信彦	金沢工大4	179	0
	⑯	小松伊佐夫	中央3	180	0
FP	②	関　健三	中央4	180	21
	③	後川　一夫	日体4	180	0
	④	千葉　史信	東北学院4	180	6
	⑤	西窪　勝広	中央4	177	6
	⑥	鈴木　健文	早稲田4	175	0
	⑦	泉　喜久男	早稲田4	174	11
	⑧	坪子　義明	中央4	171	1
	⑨	生駒　靖夫	京都産大3	183	21
	⑩	洞ケ瀬直幸	早稲田3	181	13
	⑪	長野　透	中央3	176	4
	⑬	勝地　文雄	慶応3	176	0
	⑭	大西　和雄	日体3	168	0

- ○内数字は今回の背番号
- 校名右の数字は学年
- 右欄の数字は世界学生における得点

親善試合

遠征第1戦・グリースハイム選抜との試合は51年12月29日午後8時からグリースハイム（フランクフルト）体育館で行われた。

日本 20（9―10, 11―6）16 グリースハイム選抜

【日本】		得
GK	岡部	0
GK	小松	0
FP	関	5
FP	千葉	0
FP	西窪	4
FP	勝地	0
FP	洞ケ瀬	3
FP	生駒	4
FP	鈴木	0
FP	泉	3
FP	坪子	1
FP	北野	0
PT	（2）	20

▽その他の出場者▽GK酒谷、▽FP大西、長野、後川（いずれも得0）

○……緒戦とあって立ちあがり、選手は緊張気味、そのうえ時差による体調不充分もあって動きが悪かった。

しかし、前半なかばから洞ケ瀬生駒のロングが決まり出し、互角に持ちなおした。

後半になると、日本はリズムもととのい、関のロング、西窪の巧技で11分13―12と逆転した。

地元の声援をうけるグリースハイムは、日本の守りのもろさをついてロング、ポストで強引に攻めこみ、再びペースを握ったが、日本もよく反撃、関、泉の活躍で一気にリードを奪い返した。

このあと、生駒の5分間退場などあったが、残り6分を無得点におさえて、遠征第1戦を巧くものにした。

後半、疲れで崩れる

第2戦・ディツェンバッハとの試合は12月30日午後7時30分からディツェンバッハ（フランクフルト）体育館で行われた。

ディツェンバッハ 23（10―8, 13―8）16 日本

【日本】		得
GK	小松	0
GK	岡部	0
FP	生駒	1
FP	洞ケ瀬	1
FP	泉	3
FP	関	5
FP	西窪	3
FP	後川	1
FP	北野	0
FP	鈴木	1
FP	勝地	0
FP	千葉	1
PT	（3）	16

◇その他の出場者▽GK酒谷▽FP大西、長野、坪子（いずれも得0）

○……ディツェンバッハは西ドイツ全国リーグ南地区5位の強豪平均身長で10㎝以上の差があったが日本は積極的なプレスディフェンスでよく対抗、GK岡部が3本のPTのうち2本を阻止する活躍もあって、前半は五分の戦況だった。

しかし後半になると、守りで力を使いはたすため、攻撃に鋭さがなくなり、10―14のあと15分間無得点、この間にディツェンバッハの強引なカット・インプレーにあってポイントを奪われ、点差がついた。

終盤、日本はスカイプレーの成功などから好テンポとなり猛反撃したが、中盤での傷口は埋め切れず及ばなかった。

残り30秒に追いつく

第3戦・ベンツハイムとの試合は52年1月1日フランクフルトのベンツハイム・スポーツホールで行われた。

日本 27（12―13, 15―14）27 ベンツハイム
引き分け

【ベンツハイム】		得
GK	ブラウナー	0
GK	ブレーム	0
FP	ローゼル	0
FP	ベツク	1
FP	ベーレ	1
FP	シュミット	10
FP	ラウシャ	0
FP	ザイデル	7
FP	セーリィ	1
FP	シンク	1
FP	デウー	3
FP	クーン	3
PT	（4）	27

【日本】		得
GK	小松	0
GK	酒谷	0
FP	長野	2
FP	西窪	3
FP	関	7
FP	泉	4
FP	生駒	5
FP	洞ケ瀬	1
FP	勝地	1
FP	北野	0
FP	千葉	2
FP	大西	2
PT	（0）	27

◇その他の出場者【日】▽GK岡部▽FP後川、坪子、鈴木【ベ】▽FPブッヒャー（いずれも得0）

○……元旦。第3戦もたいへんな乱戦になった。

ベンツハイム選抜は、長身のザイデル、シュミットのシュート力を活かしてFPから得点、日本はクイックプレーで相手のゴールを割った。

後半になるとパワープレーのベンツハイムは、日本ディフェンスを押しこんでは反則を拾い、10分までにFTから3点、PTで2点という強引な得点のあげかたをみせ、15分には7点差がついた。

日本は、残り15分を切ってから攻撃のリズムが整い、生駒のロング、西窪、大西の速攻で追いあげあっという間に1点差、残り30秒洞ケ瀬のシュートが決まって、引き分けに持ちこむ粘りを示した。

イスラエルジュニアらとリーグ

ローア国際トーナメント

1月2日、西ドイツ転戦中のイスラエル・ジュニアナショナルを迎えてのローア（フランクフルト）国際トーナメントに出場が決まり15分ハーフによる4チームリーグ戦を行なった。

第1戦（遠征第4戦）は、グロスバルドスタットと対戦。

グロスバルドスタット 14（8―5, 6―7）12 日本

【日本】		得
GK	岡部	0
GK	小松	0
FP	関	3
FP	生駒	3
FP	千葉	1
FP	西窪	4
FP	泉	0
FP	鈴木	0
FP	坪子	0
FP	洞ケ瀬	1
FP	長野	0
FP	勝地	0
PT	（1）	12

◇その他の出場者【日】FP大西、北野（いずれも得0）

○……グロースバルドスタットは

西ドイツ全国リーグ南地区1位というヨーロッパ球界でも屈指の強者。GKホフマン（注・モントリオール予選で西ドイツが東ドイツを破った時の最大殊勲者）、FPクルースパイスと攻守の要に五輪代表を配し、さすがに洗れんされたプレーをみせた。

日本も、ようやくヨーロッパでの試合になれ、西窪のスカイプレー、生駒のロングでよく対抗したが、先行したグロースバルドスタットは、後半10分12—8と主導権をはなさなかった。

しかし、粘る日本は残り4分から、大西—西窪のスカイプレー、洞ケ瀬の速攻などで追いこみ1点差として、満員の場内を大いにわかせたが、残り30秒、相手のロングを受けて、惜しくも敗れた。

厳重な警戒しかれる

第5戦、イスラエル・ジュニアナショナルとの試合は「ローア・トーナメント第2戦」として1月2日ショートニングマッチ（15分ハーフ）で行われた。

日本 12（8—8, 4—3）11 イスラエル・ジュニアナショナル

【日本】		得
GK	酒谷	0
	岡部	0
FP	坪子	0
	北野	0
	生駒	2
	関	5
	西窪	2
	洞ケ瀬	2
	鈴木	0
	千葉	1
	後川	0
	大西	0
PT		（0）12

◇その他の出場者【日】FP勝地、長野（いずれも得0）

○……24才以下の若手によるイスラエル・ジュニアナショナルはモスクワ五輪と、4月の第1回世界ジュニアに備えて西ドイツを強化転戦中。思わぬところで対戦となった。（編集委注・イスラエルの世界ジュニア参加はその後とりやめになったと伝えられている）

会場には、イスラエルを警固する武装警官が目立ち、巻きぞえになってはという配慮から日本チームにも小銃片手の警備隊がついた

ともにディフェンスが甘く前半は取ったり取られたりの展開。

日本は9分6—4とリードしたがイスラエルの斗志もなかなかで前半終了間ぎわ同点にされた。

後半、日本は関の連続得点と洞ケ瀬のジャンプシュートで6分11—8と好ペースだったが、そのあと追加点がなかったため、相手の反撃をくい9分11—11。

しかし、11分洞ケ瀬のあげた1点を巧く守って苦しい勝利をものにした。かってない異様なムードでの試合であった。

終盤でローア突き放す

第6戦・ローア選抜との試合は「ローア・トーナメント第3戦」として1月2日ショートニングマッチ（15分ハーフ）で行われた。

日本 14（6—8, 8—3）11 ローア

【日本】		得
GK	小松	0
	岡部	0
FP	関	6
	西窪	4
	坪子	0
	長野	0
	千葉	1
	生駒	1
	洞ケ瀬	2
	鈴木	0
	勝地	0
	大西	0
PT		（2）14

◇その他の出場者▽GK酒谷▽FP北野、泉（いずれも得0）

○……ローアはイスラエル・ジュニアに勝って気をよくしており、立ちあがりから積極的な攻めで日本は10分3—5とリードを奪われた。

後半になってようやくディフェンスの立ち直った日本は、GKの堅守もあってローアに得点を許さず、攻めても好機を着実につかんで5分8—8にしたあと6分洞ケ瀬、7分PT（関）で一気に逆転した。

8分いちどは同点にされたが、余裕の出た日本は残り5分西窪、千葉らでたたみかけ、追いすがるローアを振り切り、このトーナメントで2位の成績となった。1位はグロスバルドスタット、3位ローア、4位イスラエル・ジュニアナショナル。

前半のリード活かす

第7戦・ウワブラッハとの試合は1月4日午後7時30分からウワブラッハ・スポーツホールで行われた。

日本 28（14—10, 14—15）25 ウワブラッハ

【ウワブラッハ】		得
GK	ミッシェル	0
	ミュラー	0
FP	ベイラント	8
	ラインハルト	2
	ブルーンス	1
	カーン	6
	ゴッホ	2
	ハレナノル	0
	シュルトハイス	1
	ヴィル	2
	シュワスコフ	1
	ショーパス	2
PT		（1）25

【日本】		得
GK	酒谷	0
	岡部	0
FP	関	7
	後川	0
	西窪	8
	鈴木	1
	泉	6
	坪子	0
	洞ケ瀬	1
	長野	2
	勝地	0
	大西	3
PT		28（0）

◇その他の出場者【日】FP北野（得0）

○……ウワブラッハは西ドイツ下部リーグ。日本に一あわ吹かそうと張り切っていた。

日本は連戦の疲れがのぞき、ゲーム展開にいまひとつ迫力を欠いた。このため、実力差はありながら意外な接戦となり、前半どろにか先行したものの、主導権を握るまでに時間がかかった。残り10分からメンバーをひんぱんに入れ替えたため、その間げきをつかれたが、後半なかばでのリードを活かして逃げ切った。

多彩な攻めを応酬

第8戦・キリッヒブロンパッハとの試合は1月5日に行われた。

日本 24（15—14, 9—8）22 キリッヒブロンパッハ

【キリッヒ】	得		【日本】	得
クェオレフ	0	GK	岡部	0
ヴェンナー	0	GK	小松	0
フィッシャー	4	FP	洞ヶ瀬	5
ハイン	6	FP	後川	0
パウル	2	FP	勝地	0
フリーク	0	FP	関	9
トラウマン	0	FP	千葉	5
キーゼル	2	FP	西窪	3
シュワルツ	5	FP	鈴木	0
ベオク	0	FP	泉	1
ヨン	3	FP	大西	0
シューラー	0	FP	長野	1
22	(1)	PT	(0)	24

◇その他の出場者【日】FP坪子、北野、【キ】FPヴィンゲン（いずれも得0）

○……西ドイツ2部リーグで上り坂という相手だけに、攻守に粘り強さがあり一進一退を最後までつづけた。

日本は、前半、関が8点をたたき出す活躍をみせたが、ディフェンスの乱れからこれをリード点にすることができなかった。

キリッヒはハインのロングとフィッシャーのサイド攻撃に鋭さがあり、前半のシュート成功率は日本が58％、キリッヒが67％という乱打戦。

後半、互いにディフェンスが立ちなおったが、日本は欠場の生駒の穴を埋めた千葉の健斗と長野、西窪、洞ケ瀬らの多彩な攻めでポイント、最後までリードを許さず押し切った。

疲れをのぞかすものの、日本の攻撃は1試合ごとに鋭さを加えている。

痛かったPTの失敗

第9戦・グルシュタットとの試合は西ドイツでの最終試合として1月6日に行われた。

グルンシュタット 25（13—9 / 12—8）17 日本

【グルンシュタット】	得		【日本】	得
バルッシュ	0	GK	岡部	0
グレイン	0	GK	酒谷	0
キンディゲル	1	FP	西窪	4
ヴェンネル	3	FP	大西	0
ムーラー	2	FP	長野	1
カーフ	1	FP	千葉	0
ミューラー	2	FP	生駒	1
フライエル	8	FP	泉	2
ボーナー	6	FP	関	6
ロス	1	FP	洞ケ瀬	2
ヴィットマン	1	FP	北野	0
セリエ	0	FP	鈴木	1
25	(2)	PT	(1)	17

◇その他の出場者【日】FP勝地、後川、坪子（いずれも得0）

○……張りつめていた緊張がふっとゆるんだような日本の試合ぶり

いきなり2—6と引きはなされた焦りもあって凡ミスが続き、点差を縮めるべき時に得たPTを再三失敗するなど、自滅といえた。

これで西ドイツでの全スケジュールを終えたが、内容的に今一つのものがありながらの勝ちこし。まずまずとみるべきだろう。

タルノフに完敗喫す

遠征第13戦は、1月15日タルノフ（ポーランド）で、地元選抜と行われた。この試合は世界学生選手権第4戦（対ベルギー）の代替としてのもの。

タルノフ選抜 32（14—10 / 18—12）22 日本

	【日本】	得
GK	小松	0
GK	岡部	0
FP	関	1
FP	後川	8
FP	生駒	3
FP	洞ケ瀬	3
FP	長野	2
FP	泉	1
FP	千葉	2
FP	坪子	0
FP	大西	2
FP	勝地	0
PT	(1)	22

▽その他の出場者【日】FP北野、鈴木（ともに得0）

○……前日のチュニジア戦（18頁参照）の不可解なレフェリングに選手たちはショックを受けてしまい、気をとりなおそうにも、どうにもならない感じ。

生駒の連続ゴールで立ちあがりこそ五角だったが、そのあとは攻守にまったく精彩を欠き、タルノフのパワーに圧倒されて終った。

感嘆した〝本場の環境〟

□……西ドイツでの親善試合は9戦5勝1分3敗と初遠征にしてはまずまずの成績。

日本の学生ナショナルが訪独したのは14年ぶりとあって各試合とも場内は満員。

選手たちを感嘆させたのは下部のクラブでも完全暖房の専用体育館をもち、不意の国際試合にも2～12マルク（マルクは邦貨約100円）の入場料をとり熱狂的なファンを集めていること。ハンドボールの理解度も高く、さすが本場との声しきりだった。

男子にクウェート参加

近づく世界ジュニア選手権

IHF（国際ハンドボール連盟）は、今春初めての試みとして行う男女世界ジュニア選手権の予選ラウンド組み合わせを次のように発表した。

男子は4月11日から19日までスウェーデン、女子は3月18日から25日までルーマニアで開かれる。

マダガスカル、コンゴなどの登場はあるが、男女とも出場国の大半はヨーロッパ地域で、申しこんでいた韓国、インド、カナダらは出場を取り消したようだ。日本は当初からエントリーしていない。

◇男子（22カ国）組み合わせ▽A組 ソ連、東ドイツ▽B組 デンマーク、ルーマニア、モロッコ▽C組 ポルトガル、ユーゴ、クウェート▽D組 スイス、ノルウェー、スウェーデン▽E組 チェコ、ハンガリー、イスラエル▽F組 フランス、スペイン、マダガスカル▽G組 西ドイツ、オーストリア▽H組 オランダ、ポーランド、チュニジア

◇女子（14カ国）組み合わせ▽A組 オランダ、ソ連、チェコ、コンゴ▽B組 ポーランド、フランス、西ドイツ、ルーマニア▽C組 オーストリア、ノルウェー、ハンガリー▽D組 東ドイツ、ユーゴ、デンマーク

世界へはばたけ日本のハンドボール

（協賛者御芳名・順不同）

◇世界学生選手権リポート（上）

地力の養成なければ欧州の壁は破れない

団長　中沢重夫

始めに我々の参加した大会の性格を少し述べておきたいと思う。ユニバシアード（ＦＩＳＵ＝国際学生スポーツ連合）の傘下にありながら、ハンドボール、サッカー自転車の3国際学生競技連合は、ユニバシアード大会と別個に独自で学生世界選手権を開いている。参加資格はユニバシアード大会とまったく同じで、しかも国際学生スポーツ連合に加盟しておる国でないといけないのである（日本学生スポーツ連合・田島直人委員長）我々日本のハンドボール学連としては、ユニバシアード大会種目として他の種目と同時開催をしてくれると良いのにと思うのだが、ハンドボール国際競技連合は独自開催の方がメリットが多いらしく、同調して開催をしようとしない。日本とヨーロッパでは違うからである。

さて、全日本学生がこの大会に参加したのは第1回（昭38）、第6回（昭50）について3度目、私自身もハンドボールでヨーロッパを訪れる機会を持ったのはこれで3度目であった。前に二度世界選手権で渡欧しており、今回は〝学生〟世界選手権として、どの様にヨーロッパの国々の学生のハンドボールが持たれているのが大変に興味と期待を寄せ出発したのであったそしてその結果、内容はともあれとして、ゴマカシのきかないきびしさをいやという程思い知らされ帰国したという所が、偽らない心境である。

西ドイツでの転戦中もまた世界学生選手権の緒戦、ポーランド戦の時でもあの長身（1ｍ90㎝～2ｍ前後）でリーチ、歩幅、パワー等あらゆる面で体格差のあるしかも選りすぐられた相手選手達に互して競い勝つなど夢物語でなかろうかとさえ感じられたのである。対等に闘おうとすればする程大きい選手が上からカブサル様にのしかかり、そしてまた強引に割り込み、周りこみをかけてくるのである。しかもいざ勝負となったら肉体と肉体のぶつかりあいとなりわづかな傷口から大きな破たんを招き、致命傷となってしまい勝敗の分れ目となる。しかし今日、日本のチームは大体どんな外人相手としても、得点力において一ケタという事はまずない程に成長している。

とすればディフェンス、一対一では守り切れない体格差を何で補うかである。毎度の事ながら同じ課題にまたぶつかる所となった。しからばどうするか、小さいのであるからそれをカバーするだけ余分に動く事、しかも早く、機敏に幅広くである。この解答に近い試合として日本の学生選手諸君の目の前で操り広げられたのが今大会予選リーグA組の1位争いとなったルーマニア対ポーランド戦、決勝ランドの3位決定戦ポーランド対ソ連、そして決勝戦・ルーマニア対ユーゴスラビアのゲームであったと思う。ポーランドやソ連のサイドプレイヤーは日本の選手にほぼ近い身長と体格である。それが他の誰れよりも早い動きと、すばやい出足で大柄な選手以上の幅と厚さをもったプレーをこなしきるのである、日本の選手にはこれが絶対に欲しいし、これ以外にないのである。予選リーグにおいて日本は地元ポーランドに一方的に追いまくられ完敗した。しかし翌日の対ルーマニア戦には今季遠征の最高の試合を展開し大接戦となった。この最後の二、三分というのが最初に述べた体格差であり、キャリア不足であり、総合したあらゆる仮定の準備不足であると思う。日本は学生に限らず強い外国チームと大接戦をしたり、稀には勝つ事もある。しかし大接戦をしたからといって自己満足や、自からをなぐさめていたのでは誠につまらない事である。惜しまれる試合であった、ではなくてそれを突き破り勝たなくては意味がない。しかしこの僅少差を突き破る事は並大低の事で出来る事でないと思う。おそらく大接戦を演ずる力と同じ位の力をさらに加えた力（5＋5＋α）またはそれ以上の実力を要求されるのだと思う。それが壁というものであろう。ルーマニア戦における日本の学生チームの動きと気力と運は最高だったと思うし日本チームとしてやらねばならぬ事をやってのけたのだと思う

日本に粘りに粘られ、素早い詰めに動きを封じこまれたルーマニアはついに最後迄自己のペースをつかめず、ベンチのネデフ監督はついに立ち上り顔色変えてドナリ出す仕儀となった。だが最後は身体と腕力差で強引に日本はねじふせられてしまった。よくやったと選手の肩をたたいて上げたが、これを突き破り勝つ力こそ本当に欲しい、なんとかこの壁をはねのける自信が欲しいと思ったのも事実である。

時には単発的に好ゲームを演じ稀には強豪に勝てても日本の評価や地盤は決して高くならない。連続する幾つもの試合をどんな相手とも、同じレベルの内容と力を常に発揮しつづけて始めて国際舞台での〝位置〟を占め得るのだ。

それには国内での練習、あらゆる仮定を考えてのコンビネーションと気力、そしてつかんだチャンスを絶対に逃がさぬ冷静さと、スタミナが欲しい。全日本学連では今後もあらゆる努力を払いこの大会に参加をしつづけると思う。

得た教訓は引き継がれ語り継れるだろうが、ただ、多額の費用と時間が必要で学生としての限界はある。日本を振り返り、多くの国々を目のあたりに見る、これはまたハンドボールと共に学生にとって大変に有益な事であろう。

また代表となった全ての学生がそうでないかもしれないが、代表に選ばれ参加するに当って非常に沢山の人のご援助や、好意があった事に深い感謝を持たねばならないと思う。そして参加し持ちかえった多くのものをどこかで何等かの形でむくいる事を考えて欲しいと念願する次第である。（日本協会理事、全日本学連理事長、芝浦工大ＯＢ）

初遠征、外国チームの印象と日本の反省
～選手原稿～

後川一夫

僕は本大会の全試合に出場することが出来て大変幸運だったと思っています。

試合では、特にディフェンスの弱さ、体力の違いがそのまま現れて後手に廻ってしまうと相手の体力とパラー攻撃にそのまま押しこまれたり、引きずられてPTを取られるという型になってしまいました。これは出発前に予想されていたことですが、本大会―特にルーマニア戦でそれを痛感しました

前半2点差で終え、後半25分まで1、2点差のゲーム展開でした

しかし、この後半25分間ルーマニアの攻撃の大半はポストでのなだれ込み的な攻撃しかなく、平均身長190㎝のルーマニアが、10㎝も低い日本になぜ苦しんだのか、見方を変えれば、我々があのルーマニアのパワーと高さになぜあれだけ善戦できたのか、不思議です。

一つには日本GKの好守とFP6人のディフェンスが大変〝攻撃的〟で、セオリーを無視し、できるだけマン・ツウマン的な守りをしたこと、そして相手のパワーに負けない気力、斗志で立ちむかって行ったことが理由だと思います

ポーランド戦を除いてチュニジア、ブルガリアには僅差の敗戦となり、あとで気力に欠けていたこと、試合に臨むチーム全体の姿勢がもう一つまとまらなかったのが因だと思いました。

敗戦がつづき、気力に欠けたのも無理もなかったと思っていますが、出発前の目標である6位以内に入れなかったことは残念です。

参加10ケ国を僕なりに順位をつけるとルーマニア、ソ連、ポーランド、ユーゴには日本は歯がたちませんが、他の6ケ国なら我々とあまり変わらなかったと思い、国際試合では、いかに審判技術が大きく左右するかに驚き、勉強になりました。

次回ではレフェリング対策とディフェンスの研究を積めばもっと上位の成績が残ると思います。

（ＦＰ・日体大4年、岩国工出）

洞ヶ瀬直幸

初めて外国チームと公式な国際試合を行うということで、緒戦（ポーランド）の立ち上りは幾分固さが見られ、攻守に亘ってリズムが狂ってしまい、ピックアップチームの弱点が出てしまった感じで大敗をきっし、チームにまとまりというものが感じられずに、とても弱ってしまったことが、強く記憶に残っている。

でも外人コンプレックスというものではなく、ただ単にチームの弱点が出てしまったという反省だけで、そういう意味のショックはなかった。

次のルーマニア、チュニジア、ブルガリアでの試合内容からも判るように、いちどリズムに乗ると勝機はいつでもある、という感じで……。

それでも勝てなかったということにここ一番の勝つ強さがなかったとして、選手の一人である僕自身、大きな反省材料となっている

今回の大会での外国チームに対する印象というのは、やはり技を巧く使うというのではなく、力でもっていくという攻撃にやられたような感じで、体力差というものを、いやという程、痛感されられた。

守備においては、自分の体験そして準決勝、決勝の試合を見た限りでは、まことに良く動き、守備範囲の広さ、その活動量の多さに見習うべき点を数多く見せられた

守備が弱いといわれる日本チームの課題に解答らしきものを見せてくれたようで、とても勉強になった。やはり、体のない日本人は外人が動く以上に守備範囲を広くするしか方法はなく、勝機も必ずそこにあるということが再認識させられて帰ってきた。

では、どうしたら守備範囲が広くなるか？

まず60分間、守備において楽に動けまわれる体力(下半身)、広い視野、そしていちばん重要なものが数多くあり、その点については現在のハンドボールの体力づくりの点から考え直さなければいけないような気がする。

ここに今回勝てなかった反省としての重要ポイントがあったと思う。（ＦＰ・早大3年、市川高出）

千葉史信

今回の世界学生選手権に出場して痛感させられたのは、外国選手の個々の強さがチーム内でほぼ完全に発揮されていたことです。

攻守のどれをとっても1対1、地域的な局面では日本選手よりも上で、特にディフェンスでの力強さが強烈な印象となって残っています。

日本も外国選手に負けず、速い動きや、速攻、チームワークの良さで善戦しましたが、そこまでが精一杯で勝利には結びつきませんでした。しかし今振り返って見ると、結果的には一勝も出来ませんでしたが、日本チームの持味をフルに出した試合も幾つかあり、特に対ルーマニア戦では、強豪を相手に最後まで粘り、押し切られましたが一歩も引かず素晴しい攻守を見せました。

今大会を通して感じることは、幾度となく言われ続けてきた日本チームの弱点であるディフェンスは今度の場合も同様で人と人の間を割り込まれたり、強引な身体を利したプレーに押し切られ、得点を許し良く守ってもてPTもを取られ精神的な負い目を受けた。

外人選手は、肩、ヒジ、手首の上半身の使い方がうまくそれをフルに使いこなし強烈なシュートを打ち相手を圧倒する気迫をどの試合でも見せ最高の体調で試合に臨んでいた。自分は今回の大会が初の外国遠征で、日本を出発するときに習慣気候の変化による体調の維持に多少の不安があったがそれほどの苦労もせず、結果は振るわなかったけれどもある程度の力は出せたと思う。何事も無我夢中で終ってきましたが、本場ヨーロッパのプレーに身体で接して来た事は大収穫です。西独での転戦が初の外国選手との試合で、各強豪クラブと9試合を行い、本大会での外人選手との慣れをある程度持てました。いずれにしても各国選手の体力、パワーにまたしても屈しましたが、日本独特のプレーは通用するし、これからももっと幅広く活用しなければならないと思う

今後の国際大会で日本が好成績をあげるためには、やはり第一に

ディフェンスの強化であるが、これは外人選手との実戦のつみ重ねによって身につくもので、数多くの国際試合を経験することが最良だと思います。（FP・東北学院4年、仙台育英高出）

大西和雄

私の身長は168㎝。この体を最大限に活かし、2m近い外国選手にどう対処すればいいのか、それが一番の課題であった。

国内には、私同よう、俗にいう小さい選手が大半を占めていると思う。

国内合宿から私には、特にディイフェンス力の強化と共に小さい者でも充分力を発揮できる速攻、スピードある攻めを心掛け、練習を進めた。

その結果だが――サイドディフェンスでは決して上から打たれる場面はなかったが、必ずマン・ツウマンという形になり、国内のリーグ戦などとちがい、本当に集中力を欠くことのできない状態であった。集中力を欠いた時にはフェイントをかけられ、後からしがみつく、という感じでPTを取られるケースが数多かった。

今回のチームはサイド、45度ディフェンスの連絡があまりなかったようで、コンパス(身長)の差で1対1になれば、こちらの有利な間合いをとっていない限りずらされ、体半分、負けるわけで1人を1人で守らなければならないという姿勢では追いつけなかった。

また、西ドイツの下位リーグチームでもディフェンスのフォローは必ず見受けられた。

日本のチームも、この点は習慣的になるように、フォローを撤底しなければいけないと思った。

ゲーム中もディフェンスに全神経をつかい、速攻、攻撃となると大きな体力の外国選手に対し、かなり負担を感じたようだった。

だが、この問題に関しては、自分自身の体力の無さ、精神力の弱さが出ていたようだが。

次に、日本チームの武器とする速攻では、単純な縦パスを多用しすぎ、背の高い選手を超すパスがスローになり、タイミングが合わないことが多分にあった。

速攻からいい形で決まったケースは、サイドからの切りこみや、中盤でのつながが、ディフェンスの前のワンクロスなどを使い、大きな縦パスを避けた時には得点に結びついていた。

ソ連は175㎝ぐらいの選手が2人あとは190㎝以上で、大きな者は小さい者を使い、小さな者も大きな者を使っていて、その〝相対関係〟が、小さい私には印象的だった

ルーマニア、ポーランドと強豪チームに見られたのは、スポーツ競技でいちばん大事であるとされるボール一個に対しての執着心が異常なまでに強いことであった。

私たちも、もっとどん欲に、純真にボールを追いかけなければいけないと痛感した。（FP・日体大3年、佐野工出）

泉喜久男

今大会での日本チームと外国チームを比較検討すると以下の様になります。

まず攻撃ですが、西独のチームでも今大会出場チームでも確実に20得点はできます。

外国チームは、身体的優位を生かしてロングミドルが中心になっています。日本チームは速攻を中心としています。しかし、今大会では、得意の速攻が相手チームの早い帰陣によって思うようにはできませんでした。しかしながら日本の多彩な攻撃、スカイプレーや脇からのシュート等の虚をつくシュートがよく決まり、攻撃面では互角であったと思います。

次に防御ですが、外国チームの得意とする高い攻撃を防ぐには、素早いつめとプレーの読みと力が必要であると痛感しました。前の2つは日本が得意とする所ですが力は日本チームの弱点です。今大会では強く押え込まない為に引きずり込まれて得点されたケースが多々ありました。日本人は下半身は強いのですが、上半身はまだまだです。今後このパワーアップが防御力の向上につながるのではないかと思います。

外国チームは殆んどが0：6防御です。日本もスタートは0：6防御であったが、フォローという面でうまくゆかず1：5に変えました。

結局、これが成功したわけでありますが、日本の身体的劣勢を補うためには、外国チームをまねるばかりでなく、攻撃同様多彩で、独特な防御法を考える必要があります。

このほか外国での試合を勝つためには、大会前の各審判の判定を把握しておく必要があるようでした。本大会も、審判によって、試合が大きく左右されたことが多々あった。外国審判は、個性が強く同様な反則でも退場、警告、注意等ととり方が様々であるからです次回を期待します。（FP・早大4年、修道高出）

酒谷信彦

全員が海外遠征の経験がまったくなく、不安と期待でいっぱいであった。

なにしろ我々にとっては〝未開の地〟へ行く、といっても過言ではなかったのである。

そこで私は、トライアルゲームを行った西ドイツにおける調整について書いておきたい。

不安な心境がぬぐい去らぬうちに、ボンとヨーロッパへ着いて環境に慣れろと云われても、日本の合宿で話を聞いたことが総て。習慣も食事も異なるし、まず何をしたらよいのかさえ戸惑う始末だった。

とにかく早く慣れねばと一日々々を送ったが、いかにしたらよいのかという解答は出なかった。

そのうちに、どうにか生活のペースが戻り、環境の変化を乗りこえるのには、時間をかけることが一番であることが判った。

その意味で、フランクフルトにおける9日間は、調整の大きな意味をもつことになったし、海外試合への気構えをととのえるためにも大いに効果があった。

次の大きな問題は体調である。出発前から首脳陣に口煩さく云われていた点でもあり食事には特に気をつかった。

ヨーロッパの食事は満腹感を味わうことができないのが日本といちばんの差である。

これには全員、最初のうちは参っていたようである。

しかし、これも時間が経つにつれ慣れたようであった。

しばしば空腹感におそわれていたのも、いつかなくなりそれなりにコンディションができた。それにしても、初めのうちは、この空腹には困った。

水にも気を付けよ、と云われていたが、これは今回の大会が冬であったせいもあり、さして問題はなかった。だが、水に何が入っているか判らないというのは不安なもので、飲んで悪いということはないと云われながらも気をつかった。海外遠征というのは実に難しいと思う。遠征における疲労というのは結局気疲れの蓄積であり、それを除くのは睡眠以外にない。いわゆる夜の睡眠時間のほかに仮眠の時間があってもよかったのではなかろうか。ともあれ、総てに貴重な遠征だった。（GK・金沢工大4年、小松工出）

勝地文雄

離日後の約10日間、西ドイツに滞在して9試合を行ない、チームプレーの調整を行ってからポーランドへ入った。

大会まで3日——西ドイツからワルシャワへ、ここで最初の予定と異なり、400㎞離れたタルナウへしかも、参加国16から10ケ国となり、当然、試合の形式も異なる。さらに、着いてから会場が急きよ変更となってタルナウのホテルへ着いたのは午後11時頃、選手の疲労の色は隠せない。

大会々場で、1時間の軽い練習が2日間、そして、翌日、世界選手権が始まった訳である。

結果論ではあるが、西ドイツでの試合が多く、ポーランド入りしてからの組合はせグループ変更、試合地変更、試合変更などで、大会への心の準備が出来ないまま、大会に突入したという感じがする他にもレフェリーの考え方の違い等、戸惑う場面があった。成績だけを見れば位という成績、満足できるものではない。しかし、ルーマニアとの激戦を頂点として、選手はがんばった。

今回の反省材料を次回の代表選手へ譲り、是非、次回は世界の壁を打ち破って欲しい。

☆　☆　☆

次回の代表選手のために、個人的見解を述べさせていただきます

一、ベンチへ入いれる数が12であるならば、派遣選手は、14いれば充分であると思う。今回の16が、少しでも多く物を持ち、チームに付いて色々と組合せようという目的ならば、西ドイツでの試合では、全く見られなかった様に見える。多額の自己負担で、しかも、試合に出られない者が多く出るのは好ましくないと思います。

二、今回の場合、身長の高い、力のある選手が多く選ばれていたが、そうすると、当然45プレーヤーが多くなる訳で、そうした場合、勝手の違うポジションをやらねばならないが、それなりの練習（特別練習）を組み入れコンビの調整を計るべきである大会に入って、急に1：5ディフェンスになったが、決して満足なディフェンス体系にはなっていなかった。不慣れな、泉サン、千葉サンに完全なディフェンスができる訳がない。ある程度、ポジションを固定化すべきではなかったか。メンバーチェンジを含め、ヒラメキでやっていた様に思うのだが…、出発前にポジションを決め、ディフェンスも2種類位用意、中大のやり方、早大のやり方といった具合いにつれ、他の選手に浸透させた方がよかったのではないだろうか!! 試合をくり返しただけでは、なかなか、直るものではないと思うのだが……。

三、これはチョッと愚痴になるのかもしれないが、西ドイツであれだけの試合数をこなし常に出場していた選手の激労は計り知れないものと思う。個人的にはあれだけの数をやるのなら、ローテーション式を取って、少しレギュラー選手を休ませるべきであったと思う。これは、僕が試合に出られなかったからいうのではなく、日本が、大会で勝つためのではなく、日本が、大会で勝つための必要不可欠なものであったと思う。これは日記にも書いてあります。西ドイツで、試合疲れして、結局、中途半端な気持ちで、大会になってしまった間接因であると思う。

四、これだけは絶体に聞いて欲しいことです。非公式にポーランドが、日本に来たいといっているが、是非、実現させて欲しい。協会内部のことは何一つ知りません。しかし、各国と常に結びつきを持っているべきです。まず、ポーランドとつながりを持ち、それから、欧州各国に広げていけば、今回のレフェリー問題も、おのずから解決するではないだろうか？ 遠く離れた欧州と気持ちだけは身近かなものにすべきである。これがなければ世界に通用するチームはつくれない。何も、いつもナショナルが行くことはない。実業団チームでも、協会が手伝って、欧州へ進出させれば良いのです。最近、ナショナルチームの試合がないし、いい機会だと思いますこちらからポーランドに呼びかけてもよいのではないでしょうか。

（FP・慶大3年、慶応高出）

鈴木健文

10日間西ドイツのハンブルグ、フランクフルトで調整はしたものの、ポーランドは共産圏でもあり西ドイツ、日本とは生活環境が違い、いろいろな面でコンディション調整に苦労した。

我々は、闘志満々でポーランド

に1月7日午前11時30分に入国したが、空港内で婦人係員がヒゲをたくわえ、鋭い目つきで見られた時は、ぞっとした。

そんな気分にさせられたのもつかの間に、ポーランドのハンドボール協会から大会の変更を知らされ、昼食後ゆっくり休む時間もなく、ポーランドの最南端の街タルナウという試合会場の近くのホテルまで遠々6時間もバスに揺られ、バスと飛行機の疲れがホテルに着いたとたん出て、全員バテぎみであった。

ホテルは一流ということであったが、食事はひどく、ボーイのサービスも悪く、我々は精神的に疲れてしまった。

その疲れも夜ゆっくり睡眠をとればなおると思っていたら、それどころではなかった。ホテルのダンスホールは毎晩一晩中パーティーをしているので、ゆっくり寝られるどころではなかった。

そんな悪い生活環境の中でも試合には、一番いいコンディションでのぞまなければいけないので、そんなこと気にせず極力寝るようにして、試合が夜ということで午前中は朝食昼食の一時までゆっくり休んで体調を整えるようにした。

練習の問題として、練習らしき練習が出来たのが予戦リーグの始まる前の2ケ日間だけで試合会場の体育館で1時間づつぐらい短時間で有効に出来たということだけであった。

本大会の試合前のアップは、広い場所と時間がなかった為、短い時間で狭い場所で体をベストコンディションにするように心がけた。体育館が日本と違って暖房がよく入っているのですぐに体が暖たまるのでその点は楽であった。

しかしながらゲーム前のアップだけではたりないので、試合会場に行く前、ホテルの各自の部屋で体操、柔軟、など軽い運動をするように心がけた。

そのほかに一番注意しなければならなかったことは、けがと風邪であった。このことがあったら今までの苦労もむだになってしまうので特に体の調子には十分各自がコントロールするように気を付けた。住みなれた母国をはなれ、異郷で戦うことの難しさを知った遠征である。（FP・早大4年、江戸川高出）

関　健三

前哨戦とコンディショニングのために立ち寄った西ドイツで試合をして感じたこと、そして今まで自分で考えていたことが実際に試合をして感じたことは、十、十一メートルからシュートなんて打たないし打てないということ、もっと的確にいうならば、確実に点を入れることを考えて打ってくるということである。ディフェンスをしていて正面にきた場合は、ほとんどシュートは打たない。しかしかならずシュートを打とうとして中に入ってくる。もっとパスを回されてきれいにノーマークができてシュートされると思っていた。それが全くちがっている。むりやりポストに落とされて点を入れられていた。どうしたら守ることができるか、自分なりに考えてみた。まず、サイドは絶対にシュートは打たせない。それにはどうするかパスをサイドに通さない。それにはどうするか。サイドをマンツーマンにする。そしてボールが入ってぬかれるにしても中、内側にしかぬかせない。世界選手権を見ていても強いチームほど的確にしていたと思います。次に45度の守りですが一対一ならぬかれてしまうだから一・五のディフェンスでは守りきれないと思う。〇・六でも六メートルラインに並ぶようなディフェンスではだめ、理想とするならばボールを持っている人に対して一人出ているようなディフェンスをしたらと思います。次にポストに対するディフェンスですが体で守ろうとしても守れるはずがない。相手は自分たちより大きいからである。それならどうしたら守れるか。一番はパスを通さないことである。どうしたらパスを通されないかパスをする人とそのボールを取る人の間に入ることである。自分はそのポストを守ってきたがパスをたくさん通させられた一・五で守っている限りはしかたがないことかもしれない。しかし数はもっと少なくすることが出来たのではないかと思う。もっとフットワークが早ければ、もっと先をよんでいたら少しでもポストからの点を少なくできたと思う。もっと合宿で〇・六のディフェンスをしていったらと思った。攻撃の面では自分では一点でも入れればいいと思っていた。そして思ったより点が入った。しかしここで一点という時のエースがほしかった。一点を確実に入れてくれる人間がいたら勝てる試合ももっと多かったと思います。一ケ月の海外試合ですが自分としては、大きなケガもなく病気もしないで、出発前よりも体重が増えていました。そのぐらい楽しい遠征が出来たことを団長以下みんなに感謝いたします（FP・中大4年、笠間高出）

☆歴代優勝国
- 第1回（昭38）スウェーデン
- 第2回（昭40）西ドイツ
- 第3回（昭43）ソ連
- 第4回（昭46）ソ連
- 第5回（昭48）ルーマニア
- 第6回（昭50）ルーマニア
- 第7回（昭52）ルーマニア

世界へはばたけ日本のハンドボール

(協賛者御芳名・順不同)

◇岐阜県実業団ハンドボール連盟◇

会長	清水晴次	大垣市中曽根町	日本耐酸壜工業取締役
副会長	柳瀬準一	岐阜市西部中島	二和家具工業取締役
理事長	森島清明	大垣市中曽根町	日本耐酸壜工業
理事	隅田泰生	不破郡垂井町宮代	帝人製機岐阜工場
	新村 茂	岐阜市西部中島	二和家具工業本店
	泉 文俊	安八郡安八町大森	三洋電機岐阜工場
	安武英巳	大垣市久徳町 239	太平洋工業
	浅野敏夫	大垣市中曽根町	日本耐酸壜工業
	高橋省吾	大垣市神田町	揖斐川電工本社

◇愛知県実業団ハンドボール連盟加盟会社及び団体◇

アイシン精機株式会社
新日本製鉄株式会社 名古屋製鉄所
自衛隊春日井
大同製鋼株式会社
中部電力株式会社
トヨタ自動車工業株式会社
トヨタ車体株式会社
トヨタカローラ愛知株式会社
豊田自動織機株式会社
豊田工機株式会社
豊田合成株式会社
株式会社トーメン名古屋支社
日本碍子株式会社
パイロットインキ株式会社
伏原紡織株式会社
ブラザー工業株式会社
三菱自動車工業株式会社
名古屋自動車製作所

(アイウエオ順)

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆

海外トピックス

杉　山　茂
（NHK運動部）

ヨーロッパ各国は、新しい態勢をととのえて、佳境に入ったシーズンを彩っている。

次々に伝えられるビッグトーナメントの結果は波乱ぶくみ、来年1月の第9回世界選手権、同12月の第7回世界女子選手権目指してこれからどのような強化の手が打たれるか興味深い。主要大会の結果を今月は中心にお伝えしよう。

東ドイツ、ソ連破る
～バルティツクカップ～

ヨーロッパ屈指のビッグトーナメント・バルティックカップトーナメントは1月10日から16日まで東ドイツの3都市に7ケ国（8チーム）が参加して行われた。

2組の予選リーグのあと、各組同位者で順位が争われたが、決勝は予想どおり東ドイツ×ソ連となり、東ドイツが後半一気に点差を拡げ、モントリオール優勝のソ連を制した。

注目の西ドイツは予選でソ連に21—23で惜敗、結局4位に終った

▽予選リーグ・主な記録

西ドイツ 19—17 スウェーデン
ポーランド 26—25 ノルウェー
ソ　連 23—21 西ドイツ
東ドイツ 27—23 ポーランド
ノルウェー 18—16 デンマーク

▽7・8位決定戦

東ドイツB 24—22 デンマーク

▽5・6位決定戦

ノルウェー 23（11—9, 12—11）20 スウェーデン

▽3・4位決定戦

ポーランド 26（12—13, 11—10 … 2—1, 1—1）25 西ドイツ

▽決勝

東ドイツ 19（8—6, 11—7）13 ソ　連

ソ連、地元では強味
～トビリシ国際～

恒例のトビリシ(ソ連)国際トーナメントは昨年12月トビリシに7ケ国(8チーム)が参加して行われ地元ソ連が声援に応え優勝を飾った。

モントリオール決勝の再現・ソ連×ルーマニアはソ連が6点差で快勝した。

また初参加のスペインがユーゴをおさえ5位となり注目された。

▽5～8位決定リーグ

ジョルジア 26—22 ソ　連B
スペイン 24—22 ユ ー ゴ
ユ ー ゴ 30—19 ジョルジア
スペイン 22—20 ソ　連B
ユ ー ゴ 30—20 ソ　連B
スペイン 29—20 ジョルジア

【順位】⑤スペイン⑥ユーゴ⑦ジョルジア⑧ソ連B（ジュニア）

▽決勝リーグ

ソ　連 27—15 ポーランド
東ドイツ 20—17 ルーマニア
ポーランド 20(分)20 東ドイツ
ソ　連 24—18 ルーマニア
ポーランド 28—18 ルーマニア
ソ　連 24—21 東ドイツ

【順位】①ソ連②東ドイツ③ポーランド④ルーマニア

フランス、ポーランドと分ける
～フランス国際～

恒例のフランス国際トーナメント(4ケ国対抗)は2月4日から3日間メッツ市などで行われ、フランスが優勝したポーランドに、引き分けの善戦をみせるなど、熱がこもった。

ポーランド 23—15 スペイン
フランス 20—17 オランダ
ポーランド 19—16 オランダ
スペイン 18—14 フランス
スペイン 22—19 オランダ
ポーランド 20（9—10, 11—10）20 フランス

【順位】①ポーランド②スペイン③フランス④オランダ

女子は強豪が混戦
～ソ連国際大会～

ソ連女子国際トーナメントは昨年12月オデッサに5ケ国6チームが集りリーグ戦で行われ、ハンガリーが緒戦でモントリオールの女王ソ連と引き分けて波にのり、以後の試合を手固く進めて優勝を飾った。

この大会に参加したチェコ、ユーゴ、ハンガリーは引きつづきツルナワ(チェコ)で開かれた国際大会で西ドイツを加えた4ケ国リーグを行いチェコ、ユーゴ、ハンガリー、西ドイツの順になった。

▽ソ連トーナメント（リーグ）

東ドイツB 16—13 ソ　連B
ハンガリー 18(分)18 ソ　連
ユ ー ゴ 23—17 チェコ
ソ　連 20—14 東ドイツB
ハンガリー 21—8 チェコ
ユ ー ゴ 18(分)18 ソ　連B
東ドイツB 16—14 チェコ
ハンガリー 19—13 ソ　連B
ソ　連 17—14 チェコ
ユ ー ゴ 14—9 東ドイツB
ソ 連 B 15—13 ソ　連
ハンガリー 19—13 ユ ー ゴ
ハンガリー 20—17 東ドイツB
チ ェ コ 12—11 ソ　連B
ソ　連 15—14 ユ ー ゴ

【順位】①ハンガリー②ソ連③ユーゴ④東ドイツB⑤ソ連B⑥チェコ

女子の北欧選手権　めずらしく女子の北欧選手権の結果が伝えられた。

12月、ボルランジェ（スウェーデン）で行われたものでデンマークが勝った。

スウェーデン 13—10 ノルウェー
デンマーク 13—8 ノルウェー
デンマーク 15—14 スウェーデン

西独週刊誌が復刊　昨年1月、突然休刊し、多くの読者を失望させた西ドイツの「週刊ハンドボール」誌が、今春1月から復刊した。

アイルランド発足　ヨーロッパでハンドボールを手がけていない国はもはや五指にも満たないが、そのうちの一つアイルランドにこのほど協会が設立され、6チームによる全国リーグを発足させた。ウェールズ、スコットランドなどとの親善試合も行われている。

ちなみにアイルランドは、キラニンIOC（国際オリンピック委員会）会長の母国である。

ヨーロッパ・カップ

第17回男子は2月10日、ベストエイト激突による準々決勝の2回戦が終了、チェスカ(ソ連)、グンメルスバッハ(西ドイツ)、ステアウア・ブカレスト（ルーマニア）

東ドイツなど順当に勝ちあがる
～世界選手権Bグループ～

第9回世界男子選手権Bグループは2月25日から3月5日までオーストリアのウィーンなど8都市にヨーロッパの12ケ国が参加して行われ、予想どおり東ドイツらが勝った。

この大会の上位6ケ国に来年1月26日から2月5日までデンマークで開かれる第9回世界男子選手権Aグループ出場権が与えられた。

Aグループ出場の16ケ国は次の通りである。

ソ連、ルーマニア、ポーランド、西ドイツ、ユーゴ、ハンガリー（以上モントリオールオリンピック1～6位）東ドイツ、スウェーデン、チェコ、スペイン、ブルガリア、アイスランド（以上Bグループ上位6ケ国）、アジア地域代表1、アフリカ地域代表1、アメリカ地域代表1、デンマーク（開催国）

アジア地域代表国は今秋、予選を開いて決められる。

▽予選リーグA組

チェコ　24（13―4、11―12）16　スイス

ブルガリア　21（11―11、10―9）20　スイス

チェコ　20（12―7、8―7）14　ブルガリア

▽同B組

スウェーデン　28（13―7、15―8）15　オーストリア

フランス　19（9―6、10―9）15　オーストリア

スウェーデン　25（14―9、11―8）17　フランス

▽同C組

東ドイツ　36（17―10、19―8）18　ポルトガル

アイスランド　29（15―5、14―9）14　ポルトガル

東ドイツ　29（15―5、14―9）14　アイスランド

ノルウェー敗れる

▽同D組

スペイン　25（15―9、10―7）16　オランダ

オランダ　18（12―7、6―10）17　ノルウェー

スペイン　16（7―5、9―5）10　ノルウェー

▽ベストシックス決定リーグA組

チェコ　16（6―8、10―4）12　フランス

スウェーデン　25（10―9、15―8）17　ブルガリア

ブルガリア　21（10―11、11―7）18　フランス

スウェーデン　24（11―12、13―9）21　チェコ

予選リーグ対戦の試合は適用

【A組順位】①スウェーデン②チェコ③ブルガリア＝以上Aグループ進出国④フランス

▽同B組

東ドイツ　21（10―6、11―7）13　オランダ

アイスランド　21（10―8、11―9）17　スペイン

アイスランド　26（13―12、13―8）20　オランダ

東ドイツ　21（10―8、11―7）15　スペイン

予選リーグ対戦の試合は適用

【B組順位】①東ドイツ②アイスランド③スペイン＝以上Aグループ進出国④オランダ

〇……Bグループの参加国はモントリオール7位（チェコ）と、モントリオール五輪のヨーロッパ予選各グループ決勝で敗れた国、それに昨秋のCグループ（本誌149号）上位3ケ国（ポルトガル、オランダ、スイス）などだった。

結果はノルウェーがオランダに逆転負けした以外は、まったく平穏で、モントリオール欠場の東ドイツが、そのろっぷんをはらすかのような試合ぶりを示した。

レギュラーに1m92以上を6人揃えたアイスランドやスペインの活躍が目立った。

スウェーデンは、46年秋来日した当時の両アンデルセンやエリクソン、オルソンらかなりのメンバーが健在である。

KFUM・フレデルシア（デンマーク）がベストフォアへ駒を進めた。ステアウアは地震で大丈夫だったろうか。

今年もフレデルシア（前回2位）の健斗が目立ち、準々決勝ではセルベナ・ブラチスラバ（チェコ）を25―17、23―25の1勝1敗ながら巧みにポイントを握った。

スペインナショナル8人を擁するカルピサ・アリカンテが、ステアウアに19―22、20―18の善戦を示したのも大きな話題である。

西ドイツで苦戦（2月末現在、全国リーグ北地区3位）をつづけるグンメルスバッハは名門の面目をこの大会にかけており、スラスク・ウラクロウ（ポーランド）を16―14、23―20で連破した。

なお、前回優勝のボラック・バンヤ・ルカ（ユーゴ）は2回戦でチェスカに23―26、16―21で敗れ姿を消している。

日本におなじみのステラ・サンモール（フランス）は1回戦で敗退

今後の日程は3月末に準決勝、4月24日に決勝の予定である。

一方、第16回女子は東欧勢が久々に参加し活気づいているが、準々決勝に勝ち残ったのは2連勝を狙うラドニツキ・ベルグラード（ユーゴ）をはじめ、SC・ライプチヒ(東ドイツ)、テイミソアラ大学(ルーマニア)、スパルタク・キエフ(ソ連)、バサス・ブダペスト（ハンガリー）、スタルト・ブラチスラバ(チェコ)ら予想どおりの強豪で、ベスター・オスロ（ノルウェー）、ヘラス・ハイエ（オランダ）がこのあと、どうからむか注目されている。

ウィンナーズ・カップ

先シーズンから始められた大会（カップ・オブ・カップス）で、来日したことのあるバロンマノ・グラノリエルス(スペイン)が第1回優勝チームになったことから、日本のファンにも関心をもたれているが、グラノリエルスは今季も緒戦を飾って準々決勝へ勝ちあがっており、今後の試合ぶりに期待がかかる。

前回2位のGW・ダンケルセン(西ドイツ、47年来日)は、準々決勝で大敵MAI・モスクワ(ソ連)と顔を合わせる。

このほかパルチザン・ブジェロバル(ユーゴ)、SC・マグデブルグ（東ドイツ）など東欧からの初出場組が好調だが、名門ディナモ・ブカレスト（ルーマニア）は1回戦でモスクワに16―23、25―20で借敗した。1年遅れてスタートした女子は13ケ国から代表が送られているが混戦模様。TSC・ベルリン（東ドイツ）有力とみられるが、スパルタク・バク（ソ連）SC・クセペル・ブダペスト（ハンガリー）らも侮れない。

世界へはばたけ日本のハンドボール

（協賛者御芳名・順不同）

クラブ界の女王に

小松市女高OG

クラブチームによる初の全国的規模の大会として注目された第1回〃岐阜カップ〃全国女子クラブ選手権は、岐阜協会が主催し昨年12月18、19の両日、岐阜県民体育館で行われた。

参加したのは中部、近畿地区の6県10クラブと、台湾からナンバー・ワンの台中紡織が来日、特別出場した。

大会はトーナメントで争われ、昭和48、50年の全日本高校選手権優勝メンバーによる小松市女高OG(石川)が圧倒的な強味を示し、初代〃選手権者〃となった。

台中紡織、準決勝で退く

▽1回戦（3試合）

名古屋ク（愛知） 28（12－1／16－0）1 住友銀行ク（大阪）

笠松ク（岐阜） 6（4－2／2－3）5 京都ク（京都）

寝屋川ク（大阪） 20（5－1／15－2）3 紅葉会（岐阜）

▽準々決勝

名古屋ク 22（9－1／13－1）2 岐阜教員ク（岐阜）

台中紡織（台湾） 19（6－6／13－1）7 伊吹ク（岐阜）

岐阜カップ全国大会

	【伊吹】	得	【台中】	得
GK	宮川	0	翁錦秀	0
GK			張芳香	0
FP	古沢	3	呉麗英	1
FP	水谷	1	欧秀因	0
FP	大橋	0	翁月若	5
FP	長野	1	呉月素	2
FP	中村	0	呉美女	0
FP	稲垣	1	呉佩娟	2
FP	河合	0	呉美香	0
FP	三輪	1	呉玉妹	3
FP	中島	0	呉保蓮	0
FP	佐竹	0	陳金燕	6

（審・杉本 林）

19（0） PT （0）7

笠松ク 7（3－3／4－3）6 静岡城北ク（静岡）

小松市女高OG（石川） 16（9－1／7－4）5 寝屋川ク

▽準決勝

名古屋ク 16（9－6／7－3）9 台中紡織

	【台中】	得	【名ク】	得
GK	翁錦秀	0	井戸田	0
GK	張芳香	0		
FP	呉麗英	1	原川	8
FP	翁月若	2	森	0
FP	陳金燕	5	加藤	3
FP	呉月素	0	金村	5
FP	呉佩娟	1	山口	0
FP	呉美香	0	竹内	0
FP	呉玉妹	0	城下	0
FP	欧秀因	0	松西	0
FP	呉美女	0		
FP	呉保蓮	0		

（審・林 上妻）

16（2） PT （0）9

小松市女高OG 23（12－3／11－0）3 笠松ク

名古屋ク、力つきる

▽決勝

小松市女高OG 15（8－1／7－1）2 名古屋ク

	【名ク】	得	【小松】	得
GK	井戸田	0	屋敷	0
GK			西川	0
FP	原川	1	貝野	0
FP	森	1	鍋島	1
FP	加藤	0	西出	2
FP	金村	0	坂	0
FP	山口	0	崎田	0
FP	竹内	0	本田	3
FP	城下	0	庄田	0
FP	松西	0	中山	3
FP			千歩	3
FP			木戸	3

（審・吉田 杉本）

15（1） PT （0）2

初のクラブ選手権を開いて

田島 静

クラブ問題が話題にされるなか岐阜協会では、県内のクラブ大会さらにブロック（東海）大会とこれまでの活動をベースにして、50年末から特別事業として全国大会の長期育成を計画、準備を重ねようやく実現させたのが今大会です。

大会を〃オープン〃とし、地域や特定の選出規定を設けない大会にする構想は、48年来日した西ドイツ女子、OSC・ラインハウゼン49年来日したデンマーク男子、スタジオンIFのヘンリクセン氏から聞いたヨーロッパハンドボール界の実情に示唆を得て踏み切ったものですが、結果的には参加チームや多数の関係者から好評を得自信をもつことができました。

さて、今大会の実態ですが、チームの構成は①高校OG②地域の活動家に指導されたチーム③恵まれない職場の中で同好者を集めたチームの三つに大別され、①として静岡城北ク、寝屋川ク、小松市女高OG、②として京都ク、名古屋ク、笠松ク、伊吹ク、③として住銀ク、岐教クがありました。

今日のクラブ界の実情を示す多様なチームの参加を得たことは、問題点の洗いなおしや、将来の展望につながる大きな収獲で、代表者会議で出された意見としては、次のようなものがありました。

第一は、大会の参加資格をどのように規制するかで、この問題はクラブ大会の今後を左右する大きなものですが、「第3回大会（昭53）までは、原則として学連、実連の登録チーム、登録者は認めない。ただし、学連登録者のうち、最上終学年で、学連公式行事を終了した者と、実連登録者のうち、実連会長杯大会参加者までは黙認する」との意見にまとまりました。

第二に、大会期日は〃一泊二日〃が限度、とする意見が圧倒的で、敗者復活戦（コンソレーショントーナメント）の実施も、強い要望がありました。

このほか、競技のあいまやハーフタイムに男子のゲーム、少年（少女）のゲームなどを織りこんでクラブ大会の特色を出す工夫をしては、といった提言もあり、参考になりました。

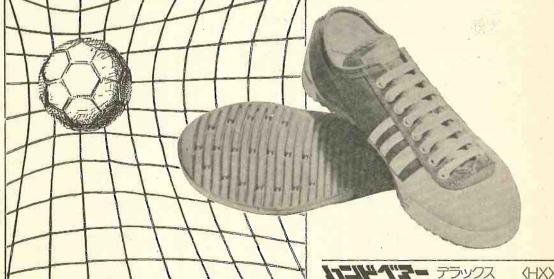
特別招待の台中紡織と各チームの交歓も盛んで、少年団交歓ゲームに参加の小学生と写真を撮るなど、楽しいムードで大会を終えることができました。

私としては、こうした大会が、春や秋にも開かれ、クラブ側が参加大会を選択できるようになるのが理想と思いますが、閉会式後「是非、来年も実施を!!」との声を受け、とりあえず52年12月に岐阜で第2回を開くよう準備することとしました。

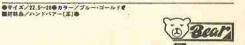
また、次回も外国チームを招きテレビ放映などにも儘力するつもりです。

競技面では若手OGをうまくまとめた小松市女高OGが、抜群のチーム力を示し優勝しましたが、クラブチームでは、当日の選手の集まり具合がチーム力を左右することを再認識しました。

また、クラブ自身の努力も痛感されました。期日の関係で参加できなかった徳山ク（山口）や、中心選手の欠場で早々と姿を消した京都クなど次回を待ちこがれているクラブも多く、来年はいっそうの活気が期待できます。

私自身は地方で雑貨店を営みながら余暇に女子クラブの世話をしていますが、ぜひ全国のクラブ関係者と力を合せて、女子クラブが発展するよう努力をしたいと思っております。（大会実行委員長、岐阜協会常任理事）

◎各地実業団大会

神戸製鋼、初優勝飾る

近畿

第6回近畿実業団選手権は、昨年10月9日から11月13日まで8チームが予選ラウンド（2組のリーグ戦）を行い、その上位5チームとシードされていた3チーム（神戸製鋼、大山商会、自衛隊舞鶴）によって決勝トーナメントが11月から12月にかけて大阪東淀川体育館、京都府体育館などで争われた。

過去5連勝の湧永薬品が広島へ移ったため、実力伯仲の乱戦模様になったが、神戸製鋼（兵庫）と丸善石油下津（和歌山）が、初の栄冠をかけて決勝で顔を合せた。両者は2回戦でぶつかり丸善が勝っていたが、神戸は敗者戦を勝ち抜き再度対戦、延長にもつれこむ熱戦から神戸製鋼が勝利を飾った。

▽予選ラウンド・リーグA組
丸善石油下津（和歌山） 20―18 大阪ガス（大阪）
住友銀行（大阪） 13―8 鐘渕化学（兵庫）
丸善石油下津 27―12 住友銀行
丸善石油下津 33―5 鐘渕化学
大阪ガス 22―18 鐘渕化学
大阪ガス 15―14 住友銀行
【順位】①丸善石油下津②大阪ガス③住友銀行④鐘渕化学

▽同B組
美津濃（大阪） 20―15 日鉄建材（大阪）
川崎重工（兵庫） 15―9 兵庫ダイハツ（兵庫）
日鉄建材 21―18 兵庫ダイハツ
川崎重工 15―7 美津濃
美津濃 17―13 兵庫ダイハツ
日鉄建材 18―9 川崎重工
【順位】①日鉄建材（得失点差7）②川崎重工（5）③美津濃（1）④兵庫ダイハツ

▽第5代表決定戦
住友銀行 11―7 美津濃

▽決勝トーナメント1回戦
大阪ガス 12―11 自衛隊舞鶴（京都）
大山商会（大阪） 16―5 日鉄建材
丸善石油下津 25―12 住友銀行
神戸製鋼（兵庫） 26―10 川崎重工（兵庫）

▽同敗者復活戦
日鉄建材 15―13 自衛隊舞鶴
川崎重工 棄権 住友銀行

▽同勝者2回戦
大山商会 20―13 大阪ガス
丸善石油下津 17―13 神戸製鋼

▽同敗者復活2次戦
神戸製鋼 23―16 日鉄建材
川崎重工 15―13 大阪ガス

▽同（勝者）準決勝
神戸製鋼 15―10 大山商会
丸善石油下津 18―15 川崎重工

▽同決勝
神戸製鋼 20（10―7、6―9、2―0、2―1）17 丸善石油下津

女子は大和銀行順当勝ち

第1回近畿女子実業団選手権は3チームによるリーグ戦によって男子（前掲）と併行して行われ大和銀行（大阪）が優勝を飾った。

和歌山県商工信用組合（和歌山） 21―7 神戸製鋼（兵庫）
大和銀行（大阪） 16―8 和歌山県商工信用組合
大和銀行 23―3 神戸製鋼

全国トーナメント関東予選

第8回全国実業団男子トーナメント（別掲）の関東予選は昨年11月21、28の両日東京調布の東京重機体育館に8チームが参加して行われ、代表5チームを決めた。

▽Aパート1回戦
東京重機（東京） （―） 日本原子力研究所（茨城）
丸善石油 （―） 出光千葉（千葉）

▽同決勝
東京重機 17（10―5、7―7）12 丸善石油千葉

▽Bパート1回戦
三井石油化学千葉（千葉） （―） 日産石油千葉（千葉）
安田生命（東京） 棄権 大成プレハブ（東京）

▽同決勝
三井石油化学千葉 21（12―5、9―2）7 安田生命

▽敗者復活1回戦（2試合）
日本原子力研究所 18（6―7、7―6、3―1、2―3）17 出光千葉
日産石油千葉 棄権 大成プレハブ

▽同2回戦
安田生命 19（10―1、9―8）9 日本原子力研究所
丸善石油 16（9―3、7―12）15 日産石油千葉

▽同3回戦
日本原子力研究所 23（12―7、11―6）13 日産石油千葉

東京重機、三井石油化学千葉、安田生命、丸善石油千葉、日本原子力研究所が代表に決定。

東海は大同7連勝 第12回東海実業団選手権（リーグ）は、昨年11月から東海各地を転戦して行われていたが、2月27日の最終日大同特殊鋼（愛知）が本田技研鈴鹿（三重）を19―17で破り5戦全勝7連勝を決めた。2位以下は本田、新日鉄名古屋、トヨタ車体、二和家具、大同高蔵の順。（詳報次号）

東北学院大が2連勝

各地の記録

第13回東北総合室内選手権は1月29、30日、青森県野辺地町の町立体育館に、各県の予選勝者男子12、女子11チームが参加トーナメントで行われた。

男子は、予想どおり東北学生1位の東北学院大(宮城)と今秋の国体を控え、強化にはげむ青森ク、七戸ユニオンの地元勢が勝ち進んだが、東北学院大が、ディフェンスの巧さで両者を破り、2年連続3度目の優勝を飾った。

女子は、日本リーグ加盟の東北ムネカタ(福島)がやはり圧倒的に強く、5年連続6度目の優勝を遂げた。

▽男子1回戦
学法石川高(福島) 8（5－2　3－3）5 大石田高(山形)
盛岡商友会(岩手) 21（10－7　11－6）13 大曲農高(秋田)
青森ク(青森) 17（7－5　10－8）13 新庄ク(山形)
岩手教員(岩手) 16（8－8　8－5）13 仙台育英高(宮城)

▽同準々決勝
東北学院大(宮城) 29（15－3　14－3）6 学法石川高
七戸ユニオン(青森) 15（9－4　6－5）9 盛岡商友会
青森ク 17（7－7　10－6）13 大曲農ク(秋田)
岩手教員 16（11－7　5－7）14 福島SG(ク福島)

▽同準決勝
東北学院大 14（9－5　5－4）9 七戸ユニオン
青森ク 16（7－6　9－6）12 岩手教員

▽同決勝
東北学院大 10（7－4　3－5）9 青森ク

▽女子1回戦（3試合）
二華会(宮城) 7（3－1　4－1）2 あすなろク(青森)
野辺地高(青森) 11（7－1　4－4）5 米沢女高(山形)
涌谷高(宮城) 8（5－2　3－1）3 花巻南高(岩手)

▽同準々決勝
東北ムネカタ(福島) 12（6－2　6－3）5 二華会
秋田和洋女高(秋田) 10（4－3　6－4）7 全岩手(岩手)
大曲農高(秋田) 12（6－0　6－1）1 野辺地高
涌谷高 9（4－2　5－6）8 全群山女高(福島)

▽同準決勝
東北ムネカタ 18（8－4　10－4）8 秋田和洋女高
大曲農高 8（2－5　6－1）6 涌谷高

▽同決勝
東北ムネカタ 14（7－2　7－1）3 大曲農高

函館有斗クの2連勝

第16回全道室内選手権は昨冬12月25、26の両日室蘭市体育館で行われ、男子は札幌勢を制して勝ちあがった函館勢の決勝から、函館有斗クが函館大谷クを前半で引きはなし2連勝を遂げた。

女子は、室蘭OGクが学生チームをおさえ初優勝した。

▽男子準決勝
函館大谷ク 13―11 エルム
函館有斗ク 17―11 札幌ク

▽同決勝
函館有斗ク 23（11－6　12－7）13 函館大谷ク

▽女子準決勝
釧路教大 8―4 登別OG
室蘭OGク 14―2 旭川教大

▽同決勝
室蘭OG 13（6－2　7－3）5 釧路教大

京都、攻守に一日の長

▼第2回京阪神3都市女子対抗大会（51年12月・京都府立体育館）

京都 9（3－5　6－1）6 大阪
京都 13（5－0　8－0）0 神戸
大阪 12（4－3　8－4）7 神戸

女子は前橋ピジョンズ

▼第17回群馬県総合選手権（1月　前橋工体育館）

▽男子準々決勝
前橋ク 27―15 桐生ク
富岡ク 22―15 藤岡高OG
前工ク 14―12 富岡高
吉井高 31―12 甘楽ク

▽同準決勝
前工ク 15―10 吉井高
富岡ク 13―12 前橋ク

▽同決勝
富岡ク 12（6－7　6－3）10 前工ク

▽女子準々決勝
前橋ピジョンズ 20―6 群女OG
桐生女高 23―9 高崎女高
吉井高 14―6 ヤングピジョンズ
群馬女短大付高 17―5 全前橋商

▽同準決勝
前橋ピジョンズ 14―9 桐生女高
群馬女短大付高 11―8 吉井高

▽同決勝
前橋ピジョンズ 14（7－6　7－4）10 群馬女短大付高

男女とも新居浜勢

▼愛媛県高校新人大会（11月・新居浜商）

▽男子準々決勝
新居浜工 24―6 新居浜商
松山西 28―9 松山北中島
松山北 11―7 吉田
松山東 20―7 今治西

▽同準決勝
新居浜工 21―10 松山北
松山西 12―8 松山東

▽同決勝
新居浜工 20―4 松山西

▽女子準々決勝
新居浜商 25―2 伊予農
新居浜東 4―3 大島
土居 10―3 松山商
松山西 5―2 今治南

▽同準決勝
新居浜商 12―8 土居
新居浜東 7―0 松山西

▽同決勝
新居浜商 8―4 新居浜東

香川は三本松が男女制す

▼香川県高校新人大会（11月・高松工芸高）

▽男子決勝リーグ
高松 7―6 高松一
三本松 8―5 高松南
高松一 7―6 高松南
三本松 9―8 高松
三本松 7―6 高松一
高松南 12―9 高松

【順位】①三本松②高松南・高松一④高松

▽女子1回戦（2試合）
高松一 3―2 高松商
高松 7―1 高松中央

▽同準決勝
三本松 9―1 高松一
高松南 10―4 高松

▽同3位決定戦
高松一 3―2 高松

▽同決勝
三本松 8（3－4　3－2　2－0）6 高松南

▼第4回久留米市(福岡)室内大会（12月・福岡県立体育館）

▽一般男子1部準々決勝
ブリヂストン久留米20—7久工大
九州産大教員6—5明善OB
ブリヂストン下関12—5特連本中
久工大付高ク16—8九産大OB
▽同準決勝
ブリヂストン（久）24—2九産教員
久工大付高ク33—8ブリヂストン
▽同決勝
ブリヂストン久留米 29—11 久工大付高ク
▽同2部決勝
BSスポーツ愛好会 13—6 久留米市体育課
▽同女子1回戦（2試合）
筑紫中央高 21—2 明善高
浮羽高 9—0 宗像高
▽同準決勝
古賀ク 7—5 筑紫中央高
浮羽高 12—0 明善ク
▽同決勝
浮羽高 4—2 古賀ク
▽高校男子決勝
久工大付 21—7 筑紫中央

延長で岩手教員勝つ

▼第19回岩手県総合室内選手権（1月・花巻市民体育館）
▽男子準々決勝
岩手教員 32—10 盛岡三高
花巻北高 13—6 花巻農高
盛岡商高 15—13 久慈高
盛岡商友会 24—7 盛岡一高
▽同準決勝
岩手教員 25—11 花巻北高
盛岡商友会 18—4 盛岡商高
▽同決勝
岩手教員 22（10—11、7—6……2—0、3—1）18 盛岡商友会
▽女子準々決勝
花巻農高 9—4 花巻北高
全岩手 15—0 大原商高
盛岡二高 9—6 平館高
花巻南高 11—3 三英芙会
▽同準決勝
全岩手 20—0 花巻農高
花巻南高 7（分）7 盛岡二高
PTコンテストで花巻南の勝ち
▽同決勝
全岩手 11（3—1、8—4）5 花巻南高
▽男子2部決勝リーグ
盛岡ク 13—8 花巻ク
花巻ク 16—8 志高ク
盛岡ク 15—10 志高ク

三宅、男女とも快調

▼東京都高校秋季大会（1月・新宿高）
▽男子準々決勝
三宅 10—5 国立
拓大一 16—12 駒沢
日体荏原 24—4 南多摩
中大付 19—5 立川
▽同準決勝
三宅 14—8 拓大一
日体荏原 10—8 中大付
▽同3位決定戦
拓大一 13—9 中大付
▽同決勝
三宅 15—12 日体荏原
▽女子準々決勝
井草 11—8 小平
三宅 18—1 西
神代 11—7 藤村
佼成 17—3 拓大一
▽同準決勝
三宅 7—5 井草
佼成 8—6 神代
▽同3位決定戦
井草 8—3 神代
▽同決勝
三宅 10—3 佼成

多彩な顔ぶれ揃える

▼第11回佐賀県室内選手権（12月佐賀県体育館）
▽成年男子準々決勝
神埼ク 23—14 佐賀商高3年
県国体事務局 12—4 神埼役場
佐賀農高3年 7（分）7 佐教オール
抽せんで佐賀農高の勝ち
佐賀ク 26—12 日本オイルシール
▽同準決勝
神埼ク 17—8 県国体事務局
佐賀ク 17—14 佐賀農高3年
▽同決勝
神埼ク 19（11—6、8—8）14 佐賀ク
▽女子1回戦（2試合）
神埼産業ク 棄権 神埼ママさん
神埼ク 8—5 武雄ク
▽同準決勝
神埼産業ク 13—1 佐賀東ク
神埼ク 7（分）7 神埼農高3年
抽せんで神埼クの勝ち
▽同決勝
神埼産業 11（7—2、4—5）7 神埼ク

氷見、抜群の得点力示す

▼富山県秋季高校選手権（11月・氷見高）
▽男子準々決勝
氷見 24—1 小杉
八尾 13—12 富山商
富山東 7—6 高岡日大
高岡商 14—6 二上
▽同準決勝
氷見 35—6 八尾
高岡商 15（延）12 富山東
▽同決勝
氷見 29（16—4、13—1）5 高岡商
▽女子準々決勝
小杉 15—1 富山北
有磯 25—0 高岡
高岡商 9—8 富山女
高岡女 10—3 富女短付
▽同準決勝
有磯 5—4 小杉
高岡女 16—4 高岡商
▽同決勝
有磯 11（9—4、2—2）6 高岡女

住化菊本、丸善をおさえる

▼愛媛県社会人リーグ後期戦（9～12月・松山）
住友化学菊本 41—15 松山ク
丸善石油松山27—18 愛媛大
新居浜ク 19—15 松山商大
住化菊本 27—10 愛媛大
丸善石油松山28—7 松山商大
松山ク 17—16 新居浜ク
住化菊本 16—10 松山商大
丸善石油松山27—13 松山ク
新居浜ク 23—18 愛媛大
住化菊本 17—10 新居浜ク
丸善石油松山20—12 新居浜ク
松山商大 18—10 愛媛大
松山ク 20—16 松山商大
松山ク 22—18 愛媛大
住化菊本 20—12 丸善石油松山
【前・後期通算順位】①住友化学菊本9勝1分（前期4勝1分）②丸善石油松山8勝1分1敗（4勝1分）③新居浜ク5勝5敗（3勝2敗）・松山ク5勝5敗（2勝3敗）⑤愛媛大1勝9敗（1勝4敗）・松山商大1勝9敗（5敗）

SGク、教員に逆転勝ち

▼第19回福島県室内総合選手権（1月・福島市体育館）
▽男子準々決勝
福島教員 13—9 聖光ヤング
学法石川高 10—8 聖光学院高
学石ク 26—9 南会津高
SGク 27—13 岩瀬農高
▽同準決勝
福島教員 35—13 学法石川高
SGク 19—11 学石ク
▽同決勝
SGク 16（7—9、9—6）15 福島教員
▽女子準々決勝
東北ムネカタ24—1 緑が丘高
郡山女高 9—4 須高長沼

福島女高 8—4 たちばなク
光が丘ク 6（分）6 全緑が丘
PTコンテストで光が丘クの勝ち
▽同準決勝
東北ムネカタ 24—6 郡山女高
光が丘ク 11—7 福島女高
▽同決勝
東北ムネカタ 17（5—3 12—3）6 光が丘ク

トヨタ車体が3連勝

▼第38回愛知実業団リーグ（1月 名古屋市体育館）
▽男子1部
トヨタ車体 15—6 豊田合成
新日鉄名古屋 12—9 大同特鋼高蔵
トヨタ車体 10—9 新日鉄名古屋
トヨタ車体 23—8 日本碍子
トヨタ車体 14—7 大同特殊鋼高蔵
大同特殊鋼高蔵 16—9 豊田合成
新日鉄名古屋 25—6 豊田合成
日本碍子 16—12 トヨタ自工
豊田合成 12—6 トヨタ自工
大同特殊鋼高蔵 18—8 トヨタ自工
新日鉄名古屋 15—7 トヨタ自工
大同特殊鋼高蔵 19—8 日本碍子
トヨタ車体 23—8 トヨタ自工
豊田合成 12—11 日本碍子
新日鉄名古屋 13—7 日本碍子
【順位】①トヨタ車体5戦全勝＝3シーズン連続4度目②新日鉄名古屋4勝1敗③大同特殊鋼高蔵3勝2敗④豊田合成⑤日本碍子⑥トヨタ自工
【2部順位】①自衛隊春日井3勝1敗（得失点差18）②パイロットインキ3勝1敗（11）③ブラザー工業3勝1敗（5）④豊田織機⑤中部電力
【3部順位】①カローラ愛知3戦全勝②豊田工機2勝1敗③三菱電機④三菱重工
▽入れ替え戦・1～2部
トヨタ自工（1部）16—9 自衛隊春日井（2部）
▽同・2～3部
カローラ愛知（3部）23—13 中部電力（2部）
▽女子（2回戦制）
ブラザー工業 28（11—0 17—1）1 豊田工機
ブラザー工業 34（17—0 17—1）1 豊田工機

二華会、古川女OG制す

▼第20回宮城県室内大会（12月・宮城県スポーツセンター）
▽女子決勝リーグ
古川女OG 9—4 宮城三女OG
二華会 15—5 宮城三女OG
二華会 9—4 古川女OG
（注）男子は本誌149号既報
▽高校男子準々決勝
仙台商 15—10 塩釜
仙台二 20—12 宮城工
仙台育英 16（延）15 古川工
古川商 16—12 古川
▽同準決勝
仙台商 15—9 仙台二
仙台育英 15—10 古川商
▽同決勝
仙台育英 16—11 仙台商
▽同女子準々決勝
古川女 15—2 祇園寺
仙台女商 8—4 一迫商
古川商 4—3 宮城二女
涌谷 10—8 飯野川
▽同準決勝
仙台女商 4—2 古川女
涌谷 12—0 古川商
▽同決勝
涌谷 5—2 仙台女商

社会人は古川工OB

▼第12回宮城県社会人秋季選手権（51年9月～1月・仙台）
仙台大OB 棄権 宮水高OB
筑館高OB 棄権 育英ク
古川工OB 22—15 学院大OB
仙商ク 棄権 宮水高OB
仙台大OB 22—14 筑館高OB
学院大OB 棄権 育英ク
古川工OB 25—14 仙商ク
古川工OB 27—10 筑館高OB
宮水高OB 棄権 育英ク
学院大OB 25—14 仙商ク
仙台大OB 23—21 仙商ク
筑館高OB 15—14 宮水高OB
古川工OB 21—19 育英ク
学院大OB 15—14 仙台大OB
筑館高OB 21—20 仙商ク
仙台大OB 21—17 古川工OB
学院大OB 18—13 宮水高OB
育英ク 23—17 仙商ク
古川工OB 28—9 宮水高OB
学院大OB 32—17 筑館高OB
育英ク 22—19 仙台大OB
【順位】①古川工OB④東北学院大OB③仙台大OB④筑館高OB⑤育英ク⑥仙商ク・宮水高OB

日本発条、乱戦ぬけだす

▼神奈川県秋季選手権（12月・厚木商高）
▽一般男子リーグ
日本発条 31—13 日進商会
三春台ク 棄権 セントラル自動車
セ自動車 16—7 日本発条
セ自動車 25—14 日進商会
日本発条 18—10 三春台ク
三春台ク 17—11 日進商会
【順位】①日本発条②三春台ク③セントラル自動車④日進商会
▽同トーナメント準々決勝
神奈川教員団 21—17 一商ク
相友ク 22—16 県商工OB
関東学院大 27—11 市川崎ク
横浜商大 25—17 浜商工ク
▽同準決勝
相友ク 16—14 神奈川教員団
関東学院大 13（延）11 横浜商大
▽同決勝
関東学院大 12（3—3 9—5）8 相友ク
▽高校男子準々決勝
関東学院 12—7 法政二
浅野 18（延）15 慶応
横浜商工 19—11 横商大付
生田 17—10 松陽
▽同準決勝
関東学院 18—10 浅野
横浜商工 23—13 生田
▽同決勝
関東学院 8（2—4 6—2）6 横浜商工
▽同女子準々決勝
上溝 8（延）6 高木
市川崎 5（延）3 高浜
川和 6—2 県商工
京浜 6—2 横須賀学院
▽同準決勝
上溝 7—4 市川崎
京浜 8—6 川和
▽同決勝
上溝 5（3—1 2—1）2 京浜

熊城会同士で争覇

▼第17回熊本県総合選手権（1月 熊本市体育館）
▽一般男子Aブロック準々決勝
熊城会 20—9 熊本大
熊本一工高 9—8 水俣ク
熊城会B 7—0 全第一工
カローラ熊本 16—7 天草教員
▽同準決勝
熊城会 12—7 熊本一工高
熊城会B 7（分）7 カローラ熊本
PTコンテストで熊城会Bの勝ち
▽同決勝
熊城会 12（7—6 5—0）6 熊城会B
▽同Bブロック決勝
水俣クB 14—4 熊本マリスト学園
▽同Cブロック決勝
豊川ク 10—6 松橋送球ク
▽同女子準決勝
熊本女商OG 5（分）5 岡川会

PTコンテストで熊女商の勝ち

菊農ヤングガール 6—5 熊本女商

▽同決勝

菊農ヤングガール 5（3—0 2—3）3 熊本女商OG

栃木女、国学院降す

▼栃木県高校新人大会（1月・国学院栃木体育館）

▽男子準々決勝

国学院栃木 15—8 石橋

馬頭 20—7 足利

烏山 11（分）11 栃木農

PTコンテストで烏山の勝ち

宇都宮工 13—10 足利商

▽同準決勝

国学院栃木 13—7 馬頭

烏山 25—17 宇都宮工

▽同決勝

国学院栃木 16（10—6 6—2）8 烏山

▽女子準々決勝

国学院栃木 17—0 足利女

小山城南 5（分）5 馬頭

PTコンテストで小山の勝ち

栃木女 12—2 作新学院

藤岡 棄権 矢板中央

▽同準決勝

国学院栃木 9—5 小山城南

栃木女 12—4 藤岡

▽同決勝

栃木女 6（4—0 2—1）1 国学院栃木

文句なし大阪イーグルス

▼大阪室内選手権（1月・大阪市中央体育館）

▽男子Aグループ準々決勝

美津濃 棄権 雪陵ク

都島工ク 18—12 城東ク

大阪イーグルス 23—9 日鉄建材

大阪教員 13—12 大山商会

▽同準決勝

大阪教員 15—12 都島工ク

大阪イーグルス 31—9 美津濃

▽同決勝

大阪イーグルス 24—17 大阪教員

▽同Bグループ決勝

八尾ク 24—18 佐野工教員

▽女子1回戦

大和銀行 21—1 大阪スターズ

▽同準々決勝（3試合）

寝屋川ク 12—3 大谷ク

門真ク 10—8 桃陰ク

大和銀行 17—4 四天王寺ク

▽同準決勝

住学ク 17—5 門真ク

大和銀行 6—4 寝屋川ク

▽同決勝

大和銀行 17—6 住学ク

佐世保西、口加おさえる

▼長崎県高校新人選手権（2月・長崎工高）

▽男子準々決勝

口加 20—4 けい浦

長崎工 15—7 鹿町工

佐世保北 15—5 長崎北

佐世保西 23—7 西海

▽同準決勝

佐世保西 23—7 西海

口加 16—10 長崎工

佐世保西 19—9 佐世保北

▽同決勝

佐世保西 19（9—3 10—1）4 口加

▽女子1回戦（3試合）

佐世保北 10—2 西彼

長崎日大 13—2 佐世保女

島原農 16—2 長崎北

▽同準決勝

佐世保商 9—4 佐世保北

島原農 12—2 長崎日大

▽同決勝

島原農 7（5—3 2—2）5 佐世保商

倉敷工と津山商

▼第8回岡山県高校室内選手権（2月・玉野青少年SC）

▽男子準々決勝

倉敷工 20—4 玉野

水工 11（分）11 倉敷商

PTコンテストで水工の勝ち

岡山工 6—5 津山工

天城 9—3 邑久

▽同準決勝

倉敷工 16—5 水工

天城 9—6 岡山工

▽同決勝

倉敷工 16（10—8 6—4）12 天城

▽女子準々決勝

津山商 15—4 落合

天城 16—3 岡山女

真備 8—1 津山

西大寺 12—3 倉敷商

▽同準決勝

津山商 14—9 天城

真備 4—3 西大寺

▽同決勝

津山商 8（4—3 4—3）6 真備

▼第7回沖縄県選抜大会（2月・浦添高）

▽男子1回戦（2試合）

大知会 棄権 イーグルス

沖縄教員 29—16 小禄OB

▽同準決勝

琉球大 14—13 沖縄教員

沖縄国際大 10—9 大知会

▽同決勝

琉球大 14（9—3 5—7）10 沖縄国際大

▽女子決勝

小禄OG 13（9—6 4—3）9 興南OG

おれとお詫び

日本協会第40回創立記念日と本誌150号を記念して発行した前号＜記録特集号＞は、おかげさまで多くのかたの好評を得、編集委あてお葉書などをいただき感謝しています。

内容的には誤りがいくつかみられ、特に桜台高(愛知)の優勝した第16回全日本高校男子決勝の校名が逆になるなどご迷惑をおかけした面も少なくありません。

次号に「正誤表」を掲載する予定ですので、誤りへの指摘、新資料の提供など4月5日までにお寄せ下さい。

日本協会編集委員会

★編集後記★

□……前号＜記録特集号＞。こわごわ出したものですが、各方面から大きな反響があり、追加注文などあって、品切れになりそうです。

過去にこうした企画が出なかったせいもありますが、やはり競技に親しんだかたには、どんな試合でも忘れることができないからでしょう。

それだけに、充分意をつくせぬ中身であったことを申訳けなく思っています。

□……初のアジア選手権。〆切りになっても、組み合わせなどまったく伝えられて来ず、気がもめます。「アジアの現状」（8〜9頁）で読者の皆さんへのガイド役だけはどうにか…。

おそらく日本は各国の目標になると思います。

モントリオール9位の実力を存分に発揮して欲しいものです

□……湧永薬品の欧州遠征、その壮挙に拍手を送ります。

パイオニアとしての苦労も出発前、すでにいくつかあったようですが、今後の球界のことを考えれば、画期的な業績になるのではないでしょうか。

□……各地の記録、3カ月分たまってしまいました。岐阜カップの記事もお待ち遠さま。（S）

練習が技術をつちかい
技術が信頼を支える

きょうの反省を、あすの練習に、試合に結びつける……スポーツマンにとって、大切な心がまえです。常により高度な技術をめざしてチャレンジする――それはブラザーが目ざしているものと一致します。技術がチームメートの信頼を支えるように、お客さまの信頼に応えるのは、高度な技術に支えられた品質以外にないのですから――。

BROTHER
ブラザー

ブラザー工業株式会社
ブラザーミシン販売株式会社

日本ハンドボール協会編
『ハンドボール』
第一五一号
昭和四十年六月七日 第三種郵便物認可
昭和五二年三月二十五日印刷 昭和五二年四月一日発行
発行所
日本ハンドボール協会
東京都渋谷区神南一－一－一
電話 代表（467）七〇九七
振替 東京 五八三四八番
編集兼発行人 荒川清美
特価 三百五十円
（年間購読料 三千三百円）